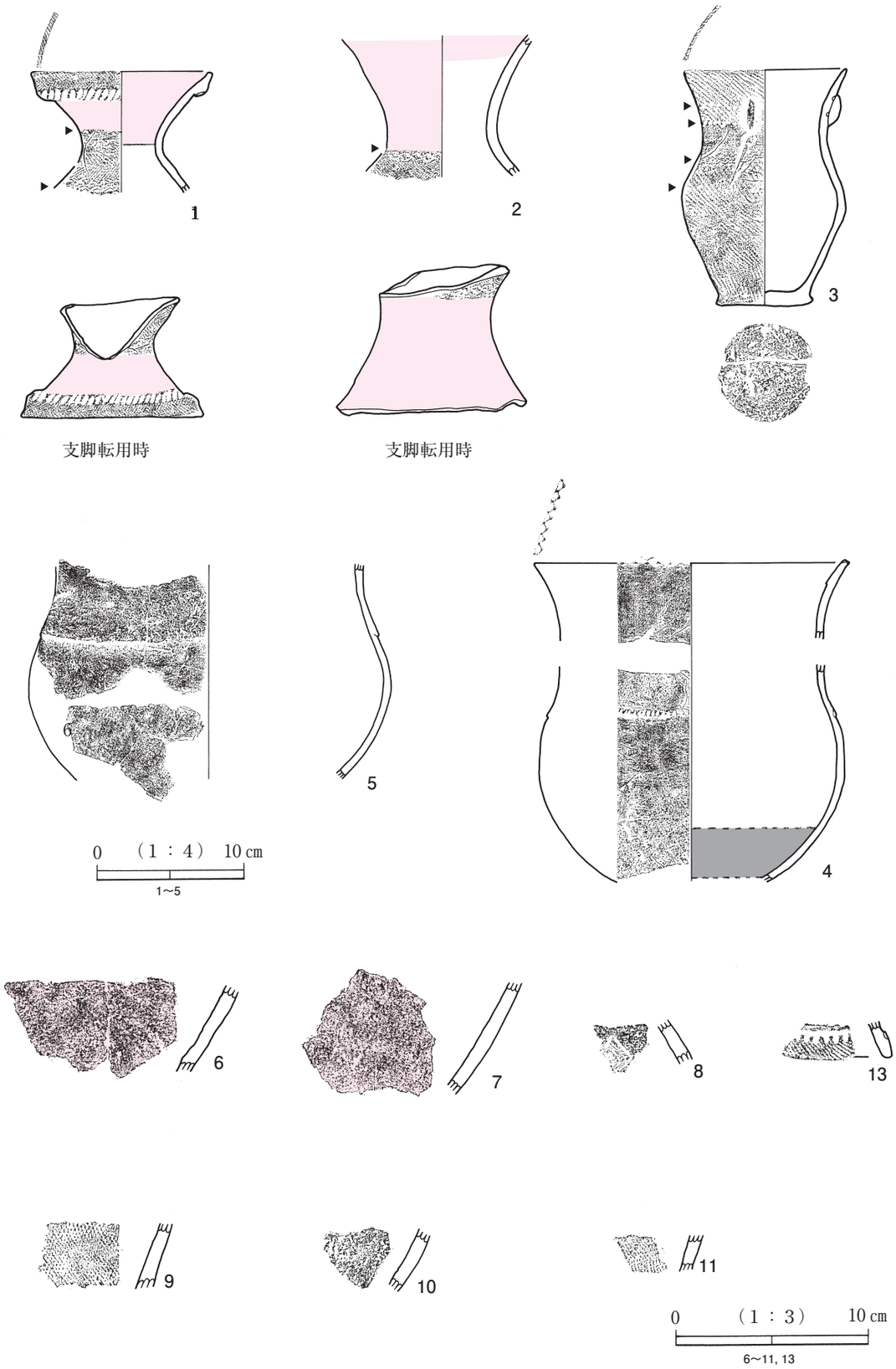


第 18 図　06D 出土遺物

3 は東関東系。頸部無文帯を挟んで，口辺と胴部に地文として附加条縄文を施文する。この後，口縁下に横位二列の円形竹管による刺突列を施し，それをまたぐ形で縦長の貼瘤（瘤状の突起）を廻らせる。本例は小形甕の略完存品。04D**5** のミニチュア版であるが，諸属性は一切省略されていない。

9 ～ **11** は甕の胴部片。附加条縄文を地文として施文するものである。

07D（第 19 図～第 20 図）

位置　L1・L2 グリッドにまたがる。**重複関係**　単独。**主軸方位**　N-59°-W。**平面形**　やや不整な隅丸方形を呈する。**規模**　3.21m × 2.85m，遺構確認面からの深さ 0.56m。**壁**　ほぼ垂直に立ち上がる。**床**　ハードロームまで掘り込んで床とする。踏み固めているとはいえ，硬化範囲と認定できるほどではない。これに対して，床面中央及び南西コーナー付近はやや軟化している。**周溝**　南西コーナーから，南壁にかけて廻らす。**炉**　検出されなかった。**貯蔵穴**　検出されなかった。**ピット**　1 本のみ検出された P1 は，位置的に見て，出入口に伴うピットの可能性がある。**覆土**　5 層に分層できた。全てが人為的な埋め戻しである。ただし，完全に埋めきるまでには，少なくとも二回（5 層上・2 層中）の廃品の廃棄を行っており，その時は一時的に埋め戻しを中断している。**遺物出土状態**　二回の「廃棄行為」が認められた。一回目の廃棄は，廃材の焼却行為及び消火活動の後で大破片が多く，二回目は小破片が中心となっている。なお，本跡の東壁外に約 1.4m 離れて土器片類の地点分布が認められた。これらの垂直分布は，現在の遺構確認面である，ソフトロームよりも 0.05m ～ 0.10m 程上部に集中し，基本層序のⅣ層（暗褐色土）の上部～最上部に相当する。また，接合の結果，地点分布内で接合が見られるだけでなく，07D 出土遺物と同一個体が含まれていた。以上から，土器類が検出されたレベルが，弥生時代後期時点の旧表土面であることと，地点分布自体が 07D へ廃棄される以前に，一旦廃品が集積されていた場所の可能性が高くなった。**建て替え**　認められなかった。**備考**　本跡は，04AD と同様に炉跡が検出されなかった。なお，本跡の廃絶から埋没に至るプロセスは，以下のように想定される。

①廃絶後の上屋などの解体→②廃材の焼却処理→③消火活動に伴う土砂の投棄（5 層）→④廃品の廃棄行為（5 層上）→⑤埋め戻しの土砂投棄（2 層～ 4 層）→⑥埋め戻しの一時中断と廃品の廃棄行為（2 層中）→⑦埋め戻しの完了（1 層）

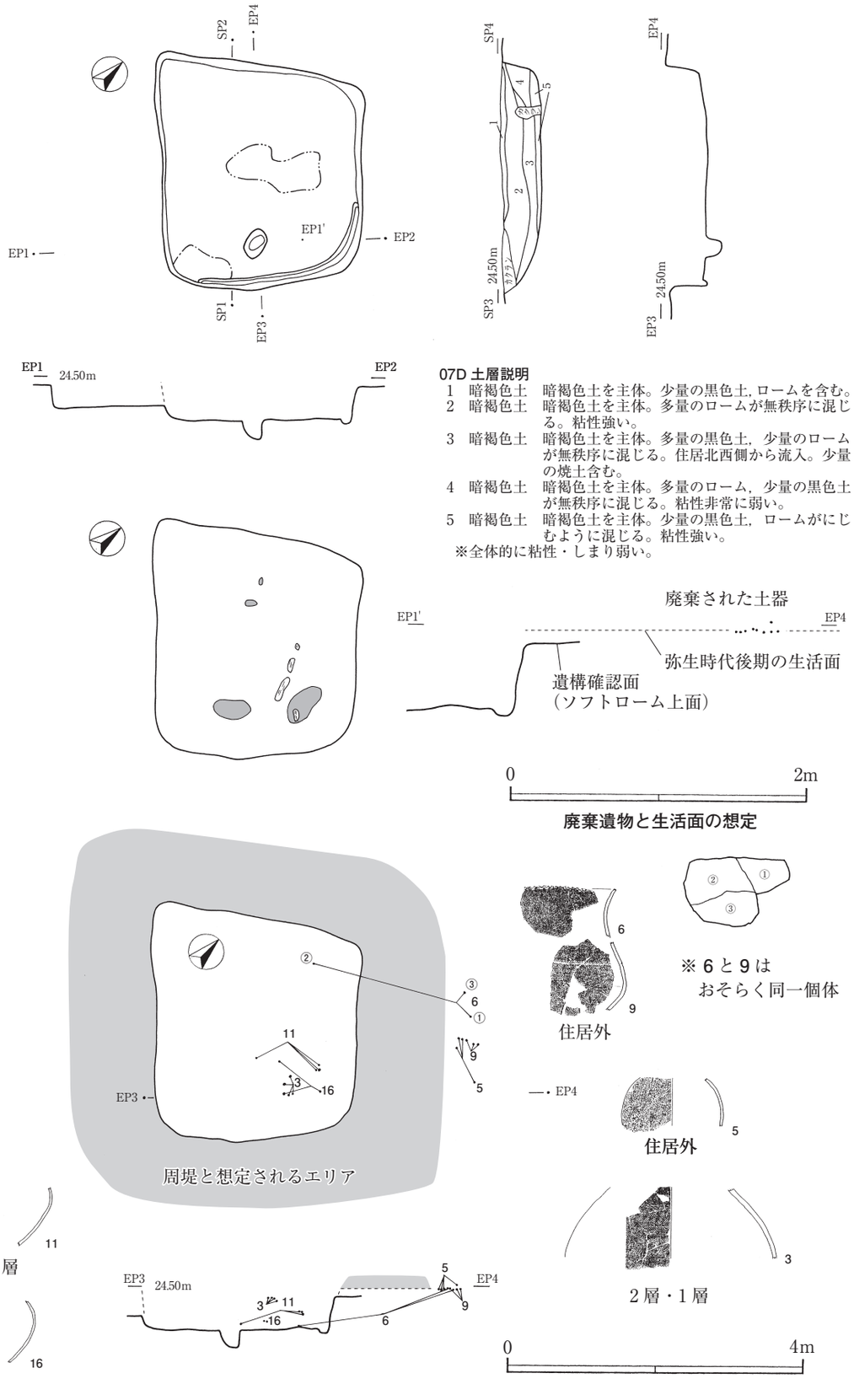
出土遺物（第 20 図）

出土総数は 506 点（弥生土器 495，縄文土器 10，石 1）で，うち 207 点をドット・マップ（遺物分布図）化して取り上げた（住居外側の遺物も含む）。

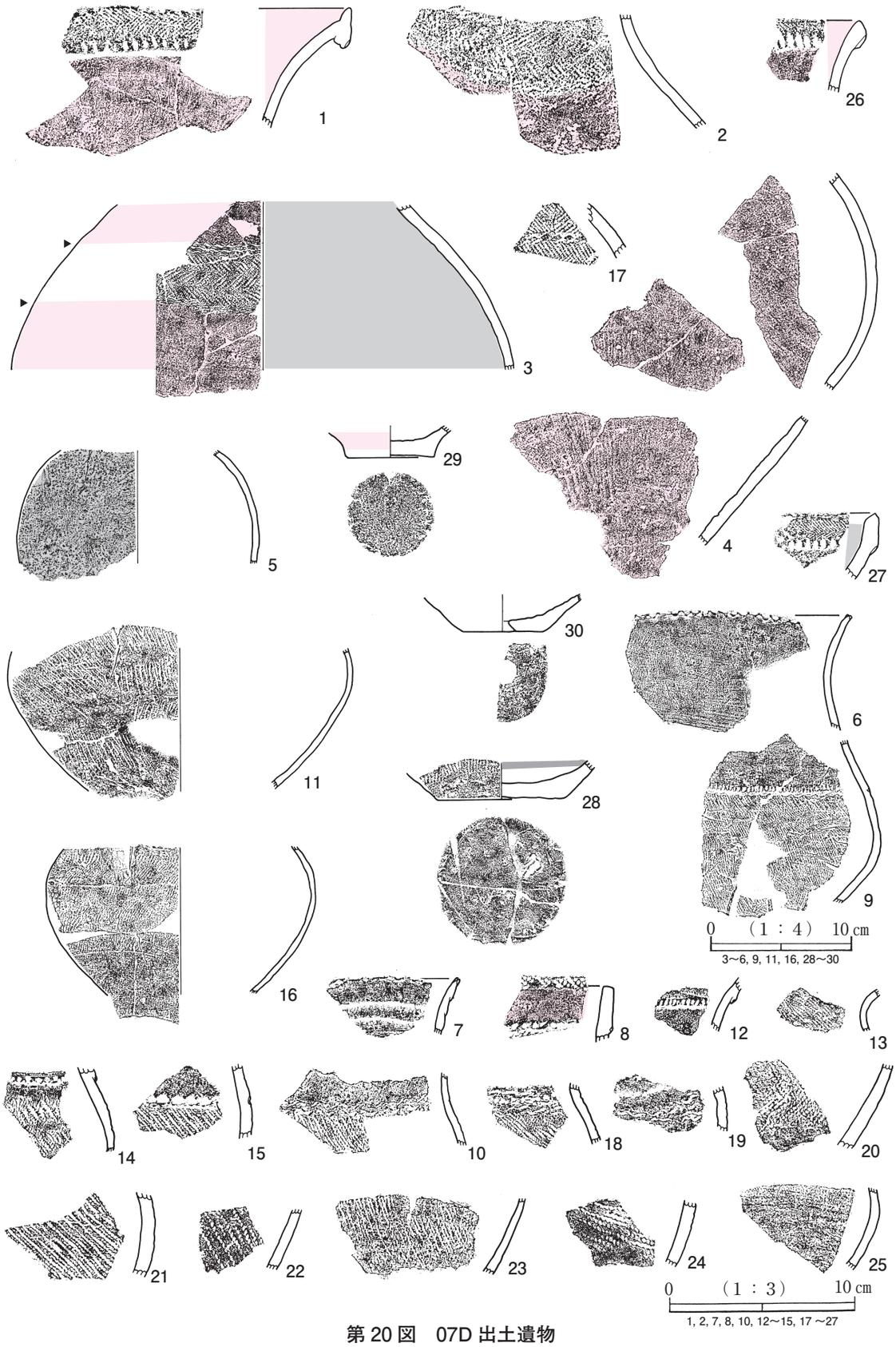
1 ～ **5**・**17**・**26**・**27**・**29** は南関東系。これらは，**27** を除いて壷である。**1** は口縁～頸部。複合口縁で，羽状縄文を施文し，口縁下端にキザミを施す。頸部はヘラミガキ後赤彩（痕跡的）。**2** は肩部片。羽状縄文を施文後，下端を結節縄文で画し，文様帯を形成する。無文部分はヘラミガキ後，赤彩。**3** は大形壷で，肩部～胴中位が残存。羽状縄文を横位に重畳施文後，上下端を 2 条 1 組の結節縄文で画し，文様帯を形成する。無文部分はヘラミガキ後，赤彩を施す。本例は胎土に石英・雲母細粒がやや目立ち，他と異質なものがある。**4** は胴上部～胴下半が残存（ピース同士は接合しない）。ヘラケズリ後ヘラミガキを施し，この後赤彩。**5** は胴部が残存。器内外面とも荒れており，調整痕は不明瞭（外面に赤彩の痕跡）。**17** は横位の結節縄文の上下に羽状縄文を施文する。本例は胎土に雲母粒子が目立つ。**26** は口縁～頸部片。幅狭の複合口縁で，羽状縄文を施文後，下端にキザミを施す。頸部及び内面全体に赤彩が施される。

27 は埦または高坏か。複合口縁で，縄文を施文後，下端にキザミを施す。**29** は底部付近。外面赤彩。

6 ～ **25**・**28** は甕で，属性的には多様な内容である。**6**・**9** は同一個体で，有段甕。口唇をひだ状にし，頸部は無文。段上にキザミを施し，胴部は附加条縄文を施文する。**14**・**15** も有段甕で，各々キザミの施文具が異なる。**7** は口唇をひだ状にし，口辺は輪積み痕をそのままに残す。**8** は複合口縁で，口唇上


SP2
EP4
EP1
EP1'
EP2
SP1
EP3
SP4
24.50m
SP3
EP4
24.50m
EP3
EP1
24.50m
EP2
07D 土層説明
1　暗褐色土　暗褐色土を主体。少量の黒色土，ロームを含む。
2　暗褐色土　暗褐色土を主体。多量のロームが無秩序に混じる。粘性強い。
3　暗褐色土　暗褐色土を主体。多量の黒色土，少量のロームが無秩序に混じる。住居北西側から流入。少量の焼土含む。
4　暗褐色土　暗褐色土を主体。多量のローム，少量の黒色土が無秩序に混じる。粘性非常に弱い。
5　暗褐色土　暗褐色土を主体。少量の黒色土，ロームがにじむように混じる。粘性強い。
※全体的に粘性・しまり弱い。
EP1'
廃棄された土器
EP4
弥生時代後期の生活面
遺構確認面
（ソフトローム上面）
0
2m
廃棄遺物と生活面の想定
②
③
6
①
11
9
3
16
5
EP3
周堤と想定されるエリア
6
9
住居外
※６と９は
おそらく同一個体
EP4
5
住居外
11
２層・１層
16
５層
EP3
24.50m
3
11
16
6
5
9
EP4
3
２層・１層
0
4m

第 19 図　07D 実測図



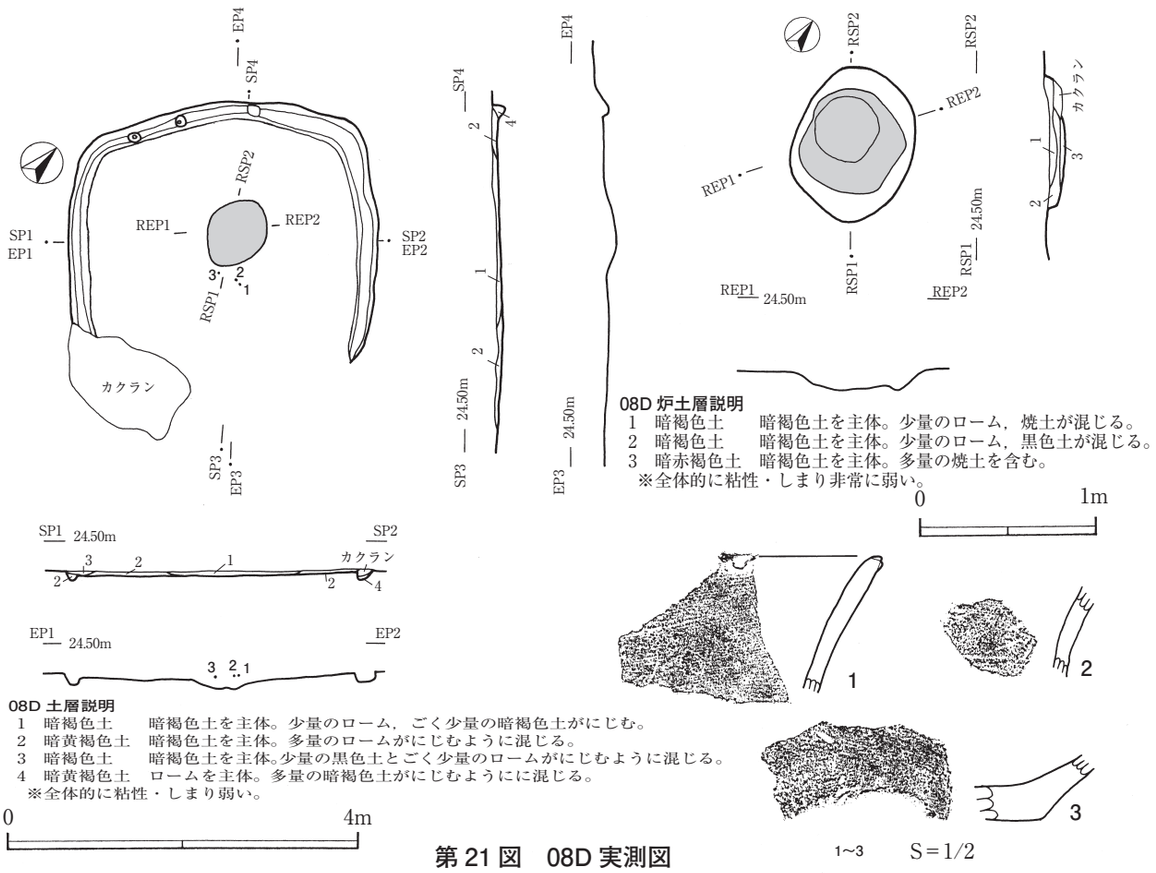
第 20 図　07D 出土遺物

に縄文施文，口縁部は無文となる。**10** は頸部無文帯と胴部の境を結節縄文で画し，胴部は附加条縄文を施文。**18・19** も胴部との境に結節縄文を施す。**11・16** は壷になるか。地文として附加条縄文を施文。**12** は口辺部片で，複合口縁の下端にキザミを施す。**20** ～ **24** は附加条縄文を施した胴部片。**25** は調整痕のみ。**30** は甕または壷の底部で，中央に外面側から焼成後穿孔が認められる。甕ならば甑に転用か。

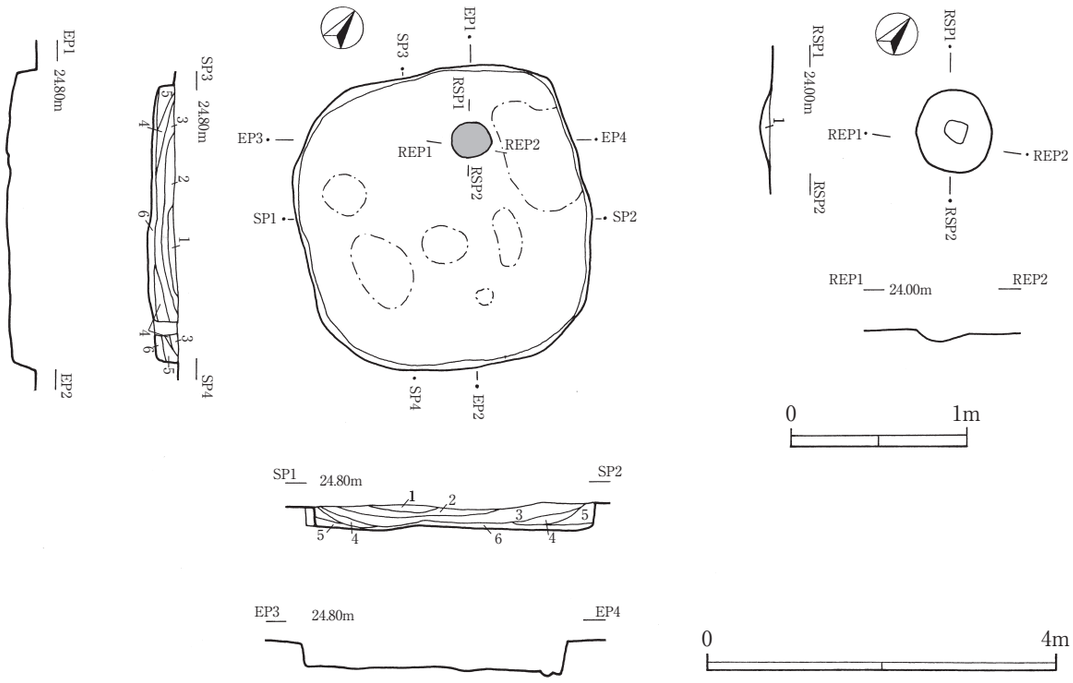
08D（第 21 図）

位置　K3・L3 グリッドにまたがる。**重複関係**　単独。**主軸方位**　N-52°-W。**平面形**　本来的には隅丸方形を呈するか。**規模**　（3.12m）× 3.55m，遺構確認面からの深さ 0.10m。**壁**　残存が比較的良好な部分では，ほぼ垂直に立ち上がる。**床**　ソフトロームまで掘り込んで床とする。全体的に踏みしまっているが，明瞭な硬化範囲は見られなかった。**周溝**　残存部分では全周する（南壁側は削平などで消失）。北壁下では周溝内柱穴２本を検出した。**炉**　ほぼ中軸上，北壁寄りに設ける。地床炉で，皿状に掘り込まれており，炉底は良く焼けている。**貯蔵穴**　検出されなかった。**ピット**　検出されなかった。**覆土**　4 層に分層できた。本来の覆土，即ち本跡を埋めていた土層の，下層しか残存していないので，多くは語れないが，自然埋没（自然堆積）と考えられる。**遺物出土状態**　炉のすぐ南側に，土器片が少量廃棄されている。出土層位は１層になるが，かなり床面のレベルに近いものである。廃絶後に上屋などを解体してから，比較的時間が経過しない内に廃棄したものと思われる。おそらくは，若干のくぼ地になっていて，中央部分はほとんど土砂が堆積していない状態だったのであろう。**建て替え**　認められなかった。**備考**　本跡は，今回検出遺構の中でもとりわけ浅く，削平などの影響を考慮したいが，遺跡全体が後世の地形改変をあまり受けていないため，他の要因も併せて考慮して行きたい。

本跡の廃絶から埋没に至るプロセスは，以下のように想定される。

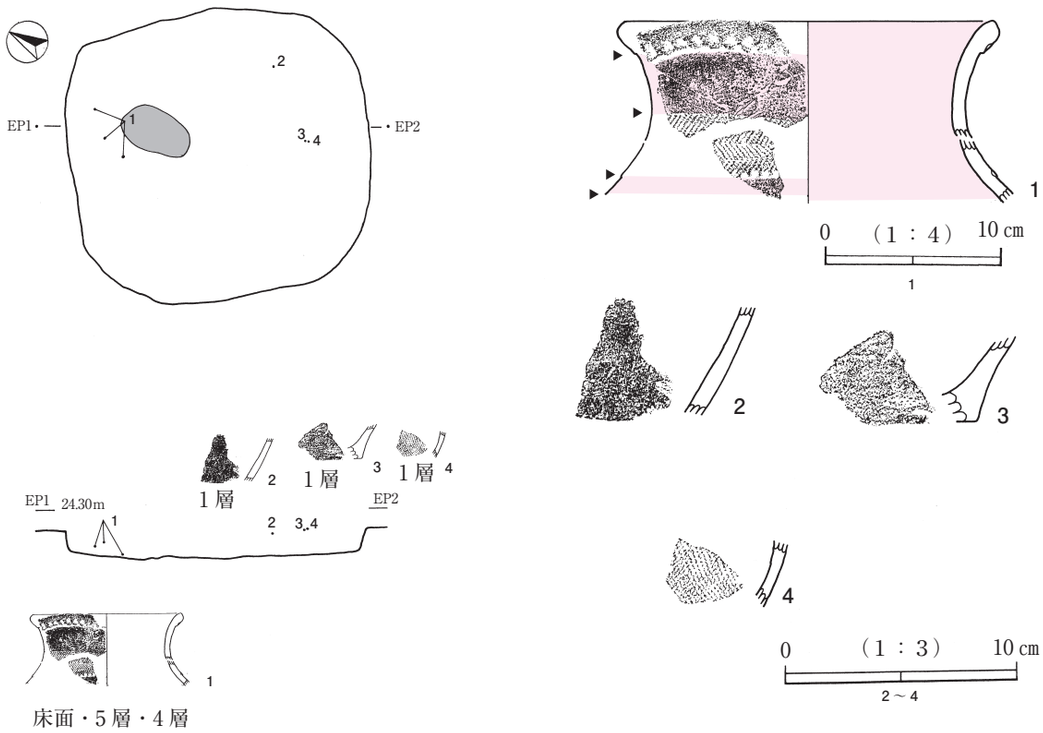


第 21 図　08D 実測図　　1～3　S＝1/2



09D 土層説明

1　暗褐色土　暗褐色土を主体。ごく少量の黒色土がにじむ。粘性・しまり非常に弱い。
2　黒褐色土　黒色土を主体。少量の暗褐色土にじむように混じる。粘性・しまり普通。
3　暗褐色土　暗褐色土を主体。少量の黒色土とロームがにじむように混じる。粘性・しまり普通。
4　暗褐色土　暗褐色土を主体。多量のロームと少量の黒色土がにじむように混じる。
5　暗黄褐色土　ロームを主体。多量のロームと少量の暗褐色土がにじむように混じる。
6　暗黄褐色土　ロームを主体。少量の暗褐色土がにじむように混じる。少量の焼土含む。
※４層，５層，６層の粘性強い，しまり普通。



床面・５層・４層

第 22 図　09D 実測図

①廃絶後の上屋の解体→②自然埋没(2層～4層)→③廃品の廃棄行為(1層下部)→④自然埋没(1層)

出土遺物（第21図）

出土総数は3点（弥生土器）で，その全てをドット・マップ（遺物分布図）化して取り上げた。

1～3は甕。**1**は口辺部片で，口唇をひだ状にし，頸部無文帯を形成する。**2**は胴部片で，地文をもたず，器面調整痕のみ。**3**は胴下半～底部片で，器面調整痕のみである。

09D（第22図）

位置　Q3・Q4・R3・R4グリッドにまたがる。**重複関係**　単独。**主軸方位**　N-52°-W。**平面形**　隅丸方形を呈する。**規模**　3.45m × 3.40m，遺構確認面からの深さ0.35 m。**壁**　ほぼ垂直に立ち上がる。**床**　ソフトロームまで掘り込んで床とする。炉の東脇，床面中央から西壁にかけて，数箇所の「島状硬化面」が認められた。**周溝**　廻らせていない。**炉**　中軸線よりは東寄りの，北壁近くに設ける。地床炉で，皿状に掘り込まれており，炉底は焼けている。**貯蔵穴**　検出されなかった。**ピット**　検出されなかった。**覆土**　6層に分層できた。6層は廃屋後に上屋を解体し，廃材の焼却処理をしてから，消火活動を行った際に投げ込まれたもの。これに対して，1層～5層は自然堆積である。**遺物出土状態**　第22図**1**は4層・5層・6層出土の破片が接合した。これに対し，同図**2**～**4**は2層出土である。これらの事象を，「廃棄」によるものか，「流入」によるものか，現状では判断が難しい。ただ，6層の事例は「廃棄」の可能性が高く，2層の事例は「流入」と解釈するのが穏当と考える。**建て替え**　認められなかった。**備考**　本跡の廃絶から埋没に至るプロセスは，以下のように想定される。

①廃絶後の上屋の解体→②廃材の焼却処理→③消火活動に伴う土砂の投棄・廃品の廃棄（6層）→④自然埋没の開始と，廃品の廃棄ないしは流入（2層～5層）→⑦完全埋没へ（1層）

出土遺物（第22図）

出土総数は13点（弥生土器11，縄文土器2）で，うち11点をドット・マップ（遺物分布図）化して取り上げた。

1～3は南関東系。**1**は広口壷。複合口縁で，頸部と胴部の境に段を有する。無文部及び内面は赤彩。**2**は壷ないし甕の胴部片。**3**は壷の底部付近。**4**は地文として附加条縄文を施した胴部片で，在地系。

第４節　土坑及び溝跡

土坑1基と，溝跡1条が調査されている。いずれも，時期決定の要素は乏しかった。

1. 土坑（第23図）

01P（第23図）

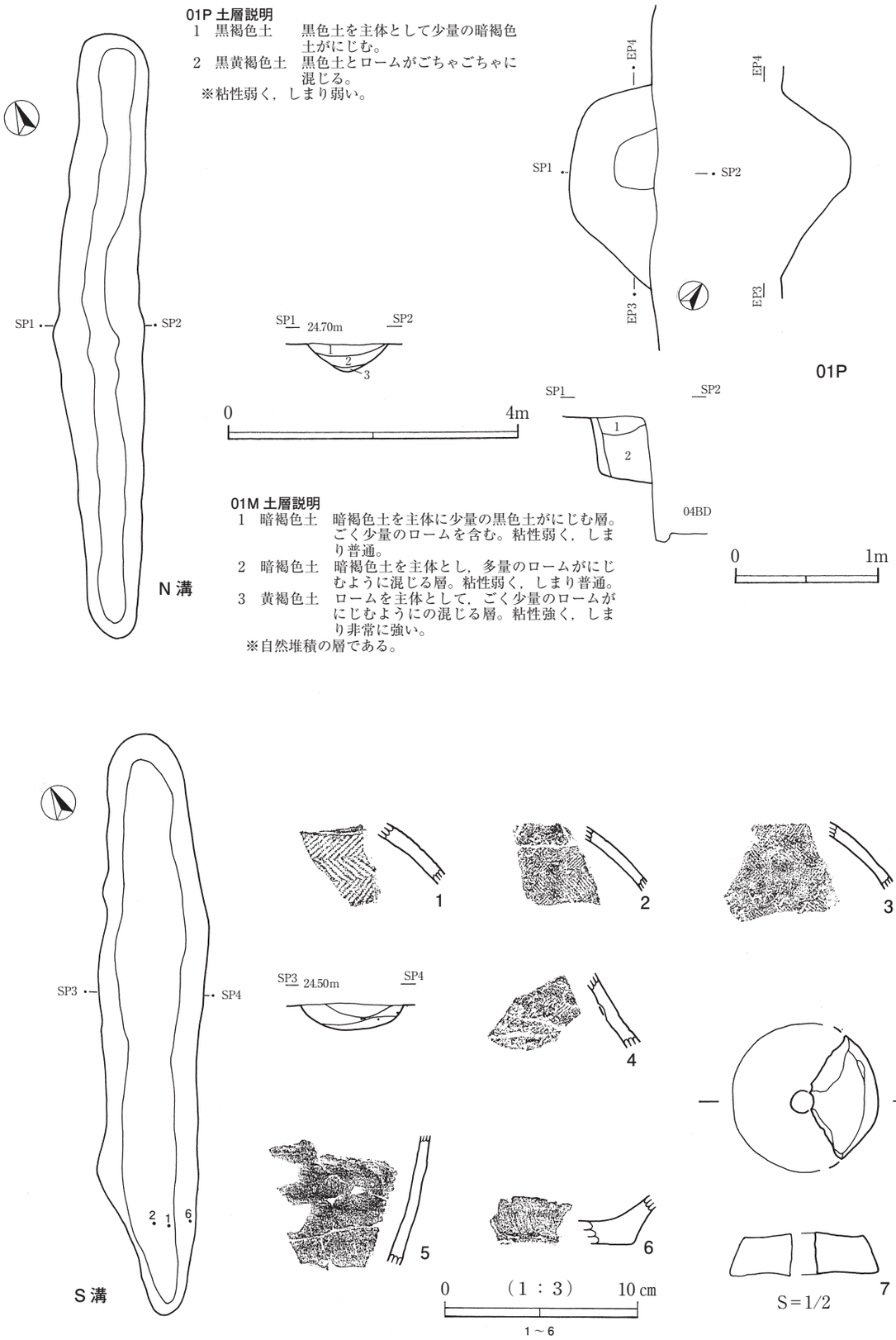
位置　H2グリッドで検出された。**重複関係**　04BDに切られる。**長軸**　不明。**平面形**　方形を基調とする（詳細不明）。　**壁・底面**　壁はゆるやかに立ち上がる。底面はやや丸みを帯び，凹凸が少ない。**規模**　(0.91m) × (0.29m)，検出面からの深さは0.48mを測る。**覆土**　2層に分層できた。黒色土系で，ともに粘性，しまりが弱い。**出土遺物**　出土しなかった。

2. 溝跡（第23図）

01M（第23図）

本跡は二つの独立した小溝からなるため，各々をN溝（北側）・S溝（南側）として記述する。

N溝　**位置**　D2・E2グリッドにまたがる。**重複関係**　単独。**長軸**　N-12°-E。**平面形**　略直線状を呈する。　**壁・底面**　壁はゆるやかに立ち上がる。底面は丸みを帯び，若干の凹凸を有する。**規模**　8.42m × 1.28m，検出面からの深さは0.41mを測る。**覆土**　3層に分層できた。全て自然埋没である。**出土遺物**　出土総数は8点（弥生土器5，土製品1，縄文土器2）で，うち6点をドット・マップ（遺物分布図）



第 23 図　01P･01M 実測図

化して取り上げた。土製品は土製紡錘車である。

Ｓ溝　位置　F1・F2・G1 グリッドにまたがる。**重複関係**　単独。**長軸**　N-11°-E。**平面形**　略直線状を呈する。**壁・底面**　壁はゆるやかに立ち上がる。底面は丸みを帯び，若干の凹凸を有する。N 溝と比較して，底面がかなり幅広に掘られている。**規模**　8.42m × 1.28m，検出面からの深さは 0.41m を測る。**覆土**　3 層に分層できた。全て自然埋没である。**出土遺物**　出土しなかった。

備考　N 溝と S 溝との間には，1.41m の間隔がある。本溝跡は，その位置から見て b 地点 02M 溝状遺構に繋がるものと考えられる。

弥生土器観察表（1）

01 D（第７図）　（単位：cm）

挿図番号	器種	口径	底径	器高	遺存	胎土	色調	手法上の特徴
1	壷		最大径		口縁～胴下半	細砂，長石，赤色スコリア，黒色粒子細粒含む。	外面赤褐色 内面橙褐色	複合口縁。頚部・肩部は羽状縄文を施文し上下端を網目状撚糸文で画す。外面は赤彩あり。内面はヘラナデ。
		〔14.8〕	〔22.2〕	〔24.6〕				
2	広口壷				口縁～頚部	細砂，スコリア細粒含み黒色粒子やや目立つ。	外面灰褐色 内面灰褐色	複合口縁。口唇上に縄文施文，上端にキザミを施す。内面はヘラナデか。本例は，高坏の裾部の可能性がある。
3	壷				口縁～頚部	細砂，スコリア細粒含み黒色粒子やや目立つ。	外面灰褐色 内面灰褐色	複合口縁。口縁部に縄文帯，下端にキザミを施す。内面はヘラナデ後，赤彩を施す。
4	壷				口縁～頚部	細砂，スコリア細粒含み黒色粒子やや目立つ。	内外面ともに淡褐色	複合口縁。口縁部に縄文帯，下端にキザミを施す。ヘラナデ後，ヘラミガキ。最終的に赤彩。
5	壷				胴部片	砂，長石，スコリア細粒，黒色粒子を含む。	外面赤褐色 内面淡褐色	外面の調整はヘラミガキを施し，焼成後に赤彩。内面はヘラナデか。
6	壷		〔9.1〕	〔2.8〕	底部	細砂，長石，スコリア細粒，黒色粒子含む。	外面赤褐色 内面橙褐色	外面の調整はヘラミガキを施し，焼成後に赤彩。内面の調整はヘラナデを施す。焼成後に赤彩か。
7	甕（甑）	17.5	〔6.2〕	20.2	口縁～底部	細砂，長石，スコリア粒を含む。	外面黒褐色 内面茶褐色	複合口縁で，口唇はひだ状。口縁と胴部は結節縄文で区画し，附加条縄文を施文。頚部無文帯を構成。底部に焼成後穿孔。内面はヘラナデ。
8	甕	〔22.4〕		〔11.7〕	口縁～胴上部	細砂，長石，スコリア粒を含む。	外面灰褐色 内面淡褐色	複合口縁で，口縁の下端にキザミを施す。口縁部と胴部には附加条縄文を施文する。内面はヘラケズリ後，ヘラナデ。刻痕が見られる。
9	甕（段甕）	〔22.6〕	最大径 〔22.9〕	〔20.4〕	口縁～胴下半	細砂目立ち，長石，スコリア細粒含む。	内外面ともに淡褐色	複合口縁で，口唇はひだ状。口縁部と胴部に附加条縄文を施文する。頚部には結節縄文を重畳させ，胴部との間に段を有す。内面は丁寧なヘラナデ。
10	埦（壷）				口縁部と胴部	細砂，長石，スコリア細粒，黒色粒子含む。	内外面ともに赤褐色	複合口縁。口縁部に網目状撚糸文を施文する。頚部は赤彩を施し，焼成前穿孔を有する。内面の調整はヘラナデで，赤彩を施す。
11	小形壷か				口辺部	細砂，長石，スコリア細粒含む。	外面茶褐色 内面茶褐色	口唇上にキザミ。沈線で画して，円形刺突列を充填。さらにキザミ列を廻らし，数単位の円形刺突列を垂下する。内面はヘラナデ。
12	甕か				頚部片	細砂，長石，石英，雲母細粒を含む。	外面茶褐色 内面茶褐色	外面は円形竹管を用いて，斜位の刺突列を施す。内面はやや荒れている。
13	甕				頚部か	細砂やや目立ち長石，スコリア細粒含む。	内外面ともに淡褐色	外面は半截竹管などを用いて，２条１組の沈線を施す。内面はヘラナデ。
14	甕				頚部片	砂，長石，石英，スコリア粒を含む。	外面淡褐色 内面橙褐色	外面は沈線による区画内に格子目文を充填する。内面は器面が荒れていて，調整は不明。
15	甕				頚部片	砂，長石，石英，スコリア粒を含む。	外面淡褐色 内面橙褐色	外面は沈線による区画内に格子目文を充填する。内面は器面が荒れていて，調整は不明。14 と同一個体。
16	甕				頚部片	砂，長石，石英，スコリア粒を含む。	外面淡褐色 内面橙褐色	外面は沈線による区画内に格子目文を充填する。内面は器面が荒れていて，調整は不明。14 と同一個体。

02 D（第９図）　（単位：cm）

挿図番号	器種	口径	底径	器高	遺存	胎土	色調	手法上の特徴
1	ひさご形壷	8.6	〔4.8〕	〔20.5〕	口縁～胴・底部	細砂，長石，スコリア細粒を含む。	外面淡茶褐色 内面淡茶褐色	外面の口縁はナデ。頚部～底部はヘラケズリ後，ヘラミガキ。内面の口縁はナデ。頚部～底部はヘラナデ。本例は土師器。
2	壷（鉢か）				頚部か肩部	細砂目立ち，長石，スコリア細粒含む。	外面黒褐色 内面暗灰色	外面には網目状撚糸文を施文する。内面はヘラナデ。本例は鉢形土器になるか。
3	壷				胴下半	細砂目立ち，長石，スコリア細粒含む。	外面赤褐色 内面暗灰色	外面の最終調整はヘラミガキ。後に赤彩を施す。内面はヘラナデ。
4	甕				頚部片	細砂，長石，スコリア微細粒含む。	内外面ともに橙褐色	外面の最終調整はナデ。内面の最終調整はナデ。
5	甕				胴下半	砂，長石，スコリア細粒，黒色粒子を含む。	内外面ともに橙褐色	地文として縄文２段 RL（前々段多条）を施文する。内面の最終調整はヘラナデ。
6	甕				胴下半	5 とほぼ同様。	外面橙褐色 内面暗灰色	5 とほぼ同様。
7	甕				胴下半	5 とほぼ同様。	外面橙褐色 内面暗灰色	5 とほぼ同様。
8	甕				胴下半	細砂，長石，スコリア粒を含む。	外面灰褐色 内面淡褐色	地文として附加条縄文を施文する。内面の最終調整はヘラナデ。

弥生土器観察表（2）

03 D（第 11 図）　　（単位：㎝）

挿図番号	器種	口径	底径	器高	遺存	胎土	色調	手法上の特徴
1	壺				口縁～頸部	細砂，長石，スコリア，黒色粒子細粒含む。	外面暗赤褐色 内面赤褐色	複合口縁。口縁部は縄文施文。頸部はヘラミガキ。のち赤彩。 内面の最終調整はヘラミガキ。のち赤彩。
2	壺				頸部	3 とほぼ同様。	3 とほぼ同様	外面の最終調整はヘラミガキ。のち赤彩。 内面は器面が荒れている。赤彩の痕跡あり。
3	壺				胴上半	細砂，長石，スコリア，黒色粒子細粒含む。	外面赤褐色 内面赤褐色	下端を結節縄文で画し，縄文を充填する。その下はヘラミガキ。のち赤彩。 内面の最終調整はヘラナデ。
4	壺				頸部～肩部	細砂，長石，スコリア黒色粒子細粒を含む。	外面赤褐色 内面橙褐色	頸部はヘラミガキ後赤彩。肩部は上端を結節縄文で画し，縄文を施文する。 内面の最終調整はヘラナデ。
5	高坏	〔20.0〕		〔10.5〕	坏部	砂，スコリア細粒含み黒色粒子を含む。	外面赤褐色 内面淡黄褐色	複合口縁で，口縁下端にキザミを施す。口縁部に羽状縄文施文。体部はヘラミガキ。のち赤彩。内面の最終調整はヘラミガキ。のち赤彩。
6	鉢				口縁部	細砂，長石，スコリア細粒，黒色粒子含む。	外面暗茶褐色 内面暗赤褐色	口唇上から口縁部に縄文施文。口縁部は羽状縄文。 内面の最終調整はヘラミガキ。のち赤彩。
7	鉢				口縁部	6 とほぼ同様。	外面黒褐色 内面暗赤褐色	口唇上から口縁部に結節縄文施文。 内面の最終調整はヘラミガキ。のち赤彩。
8	鉢か				口辺部	砂，長石，スコリア，黒色粒子細粒を含む。	外面暗灰色 内面暗褐色	下端を沈線で画し，網目状撚糸文を充填する。 内面の最終調整はヘラミガキ。
9	甕				口縁部	細砂，長石，スコリア細粒含む。	内外面ともに茶褐色	複合口縁で，口唇はひだ状。口縁部縄文（2 段 LR）を施文する。 内面の最終調整はユビナデ。
10	甕				口縁部	細砂，長石，スコリア細粒含む。	内外面ともに茶褐色	単口縁で，口唇上にキザミを施す。口縁部はナデ。 内面の最終調整はユビナデ。
11	甕				口縁部	細砂，長石，スコリア細粒含む。	内外面ともに黒褐色	複合口縁で，口唇をひだ状にする。口縁部はナデ。 内面の最終調整はユビナデ。
12	甕				頸部	砂，長石，スコリア粒含む。	外面茶褐色 内面暗褐色	上下端を結節縄文で画し，頸部無文帯を構成する。 内面はヘラケズリのちヘラナデ。
13	甕				口辺部	細砂，長石，スコリア細粒含む。	内外面ともに暗褐色	複合口縁で，口縁外面はナデ。 内面の最終調整はユビナデ。
14	甕				頸部～胴部	細砂，長石，スコリア細粒含む。	内外面ともに橙褐色	結節縄文で画し，その下は附加条縄文を施す。 内面の最終調整はヘラナデ。
15	甕				頸部～胴部	細砂，長石，スコリア細粒含む。	内外面ともに黒褐色	キザミのかわりに横位の原体側面圧痕を廻らす。その下は附加条縄文施文。 内面の最終調整はヘラナデか。
16	甕				胴部片	細砂，長石，石英，スコリア細粒含む。	外面黒褐色 内面暗茶褐色	外面は附加条縄文を施文する。 内面の最終調整はヘラナデ。
17	甕		最大径 〔21.0〕	〔11.5〕	頸部～胴部	細砂，長石，スコリア細ア細粒含む。	内外面ともに茶褐色	頸部は輪積み痕を残す。胴部はヘラケズリのちヘラナデ。 内面調整はヘラケズリのちヘラナデ。
18	甕 （段甕）		最大径 〔14.0〕	〔9.2〕	頸部～胴部	細砂，長石，スコリア細粒含む。	内外面ともに茶褐色	頸部無文帯を構成し，胴部との境に段を有し，キザミを施す。胴部は附加条縄文を施文する。内面の最終調整はヘラナデ。
19	甕				頸部片	砂，長石，石英，スコリア粒を含む。	内外面ともに灰褐色	格子目文を描く。 内面は器面が荒れており，最終調整は不明。
20	甕				胴上部	細砂，長石，スコリア細粒を含む。	内外面ともに暗灰褐色	横位の結節縄文を重畳施文する。 内面の最終調整はヘラナデ。
21	甕				胴部片	細砂，長石，スコリア細粒を含む。	内外面ともに内面灰褐色	附加条縄文を施文する。 内面の最終調整はヘラナデ。
22	甕				胴部片	細砂，長石，スコリア細粒を含む。	外面茶褐色 内面黒褐色	附加条縄文を施文する。 内面の調整はヘラケズリのちヘラナデ。
23	壺か				胴下半～底部	細砂，長石，赤色スコリア，黒色粒子細粒含む。	外面赤褐色 内面橙褐色	胴下半の最終調整はヘラミガキ。のち赤彩。 内面の最終調整はヘラナデ。器面は荒れている。
24	甕				胴下半～底部	細砂，長石，スコリア細粒を含む。	内外面ともに内面暗赤褐色	外面はヘラケズリのちヘラナデ。 内面はヘラケズリのちヘラナデ。
25	甕		〔6.9〕	〔3.3〕	胴下半～底部	細砂，長石，スコリア細粒含む。	外面淡褐色 内面橙褐色	胴下半はヘラケズリのちヘラナデ。底面もヘラ調整。 内面はヘラケズリのちヘラナデ。
26	甕	胴部径 〔15.9〕	〔7.0〕	〔13.7〕	胴下半～底部	細砂，長石，スコリア細粒含む。	外面黒褐色 内面暗茶褐色	外面全体にヘラケズリ後，部分的にヘラミガキ。 内面の調整はヘラナデ。
27	甕				底部円板部分	砂，長石，石英，雲母粒を含む。	外面淡黄褐色 内面灰褐色	外面はヘラによる調整を施すが，不明瞭。 内面は器面が荒れている。東関東系。
28	蓋	〔14.0〕		〔2.2〕	口縁～体部	細砂，長石，赤色スコリア細粒を含む。	外面茶褐色 内面黒褐色	外面はヘラケズリ後，ヘラミガキ。 内面はヘラケズリ後，ヘラミガキ。

弥生土器観察表（３）

04 D（第 14 図）　　（単位：cm）

挿図番号	器種	口径	底径	器高	遺存	胎　土	色　調	手　法　上　の　特　徴
1	壷		頚部径 12.2	〔9.0〕	口辺～ 頚部	細砂，長石，スコリア， 黒色粒子細粒含む。	内外面ともに 淡褐色	縄文を施文後，結節縄文で上端を画す。無文部はヘラケズリ後ヘラミガキ。 のち赤彩（痕跡）。内面は剥落して調整は不明。
2	甕 （段甕）	〔15.9〕	胴下半	〔8.2〕 〔3.1〕	口縁～ 胴上部	細砂，長石，赤色スコリ ア細粒を含む。	内外面ともに 橙褐色	口縁～頚部は輪積み痕をそのまま残し，軽くヘラナデ。胴部との境は段を 有し，胴部はヘラナデ。内面の口縁はナデ，胴部はヘラナデ。
3	埦	〔9.5〕		〔9.0〕	口縁～ 底部近	細砂，長石，スコリア細 粒を含む。	外面茶褐色 内面黒褐色	口縁部は輪積み痕をそのまま残す。体部はヘラケズリ後，ヘラナデ。 内面はヘラケズリ後，ヘラナデ。内容物の黒いシミが見られる。
4	甕	16.6		〔16.1〕	口縁～ 胴下半	細砂，長石，スコリア微 細粒を含み，緻密。	内外面ともに 橙褐色	複合口縁で，口縁下端にキザミ。頚部無文帯の下端を結節縄文で画し，胴 部は附加条縄文を施文する。内面はヘラケズリ後ていねいなヘラナデ。
5	甕	16.6	〔7.1〕	〔24.0〕	胴中～ 胴下半	砂，長石，石英，雲母細 粒を含む。	外面黒褐色 内面暗茶褐色	頚部に狭小な無文部を有し，口辺と胴部に附加条縄文施文。口辺部に横位 ２列の刺突を施し，それをまたぐ形で縦位の貼瘤を付す。内面はヘラナデ。
6	壷				口縁片	細砂，長石，スコリア， 黒色粒子細粒を含む。	外面茶褐色 内面赤褐色	複合口縁で，口縁下端にキザミを施す。口縁部に縄文を施文。 内面の最終調整はヘラミガキ。のち赤彩。
7	壷				胴部片	細砂，長石，スコリア， 黒色粒子細粒を含む。	外面赤褐色 内面淡黄褐色	沈線で山形文を描き，磨消縄文をとする。無文部には赤彩を施す。 内面の最終調整はヘラナデか。
8	壷				胴部片	砂，長石，赤色スコリア 黒色粒子の細粒含む。	内外面ともに 淡褐色	ほぼ７と同様。 ※外面の赤彩は痕跡的である。
9	壷				胴部片	ほぼ７と同様。	外面赤褐色 内面橙褐色	ほぼ７と同様。
10	壷				胴部片	ほぼ７と同様。	内外面ともに 赤褐色	外面の最終調整はヘラミガキ。のち赤彩。 内面の調整その他は，外面と同様。
11	壷				胴部片	細砂含む。黒色粒子 細粒やや目立つ。	外面赤褐色 内面灰褐色	外面の最終調整はヘラミガキ。のち赤彩。 内面はヘラケズリのちヘラナデ。
12	壷				胴部片	ほぼ 11 と同様。	ほぼ 11 と同様	ほぼ 11 と同様。 11 と同一個体か。
13	高坏 か				口縁部 片か	細砂，長石，赤色スコ リア細粒含む。	内外面ともに 赤褐色	口唇上に網目状撚糸文を施文する。それより下部はヘラミガキ。のち赤彩。 内面の最終調整はヘラミガキ。のち赤彩（内外面ともスリップ的な赤彩）。
14	壷				肩部か	細砂，長石，スコリア， 黒色粒子の細粒含む。	外面赤褐色 内面橙褐色	施文域には無節縄文を施文する。他はヘラミガキ。のち赤彩。 内面の最終調整はヘラナデ。
15	甕				頚部片	細砂，長石，スコリア 細粒を含む。	内外面ともに 暗茶褐色	輪積み痕をそのまま残す。軽くナデ調整を施している。 内面の最終調整はナデ。
16	甕				頚部片	細砂，長石，スコリア 細粒含む。	内外面ともに 黒褐色	頚部はナデ。胴部との境に結節縄文を２段施文する。 内面の最終調整はヘラナデ。
17	甕				胴部片	細砂，長石，スコリア 細粒含む。	外面茶褐色 内面黒褐色	外面は附加条縄文を施文する。 内面の最終調整はヘラナデ。「コゲ」が付着している。
18	甕				胴部片	ほぼ 17 と同様。	ほぼ 17 と同様	ほぼ 17 と同様。 17 と同一個体か。
19	甕				胴下半 ～底部	細砂，長石，赤色スコ リア細粒含む。	外面茶褐色 内面橙褐色	胴下半は附加条縄文を施文。底部外面はヘラ調整。 内面はヘラケズリ後，ヘラナデ。
20	甕				胴部	細砂，長石，スコリア 細粒む。	内外面ともに 茶褐色	外面はヘラケズリ後，ヘラミガキ。 内面はヘラケズリ後，ヘラナデ。本例は土師器か。

弥生土器観察表（4）

05 D（第 16 図）　　（単位：㎝）

挿図番号	器種	口径　底径　器高	遺存	胎　土	色　調	手　法　上　の　特　徴
1	壷		口縁～頸部	砂，長石，赤色スコリア，黒色粒子細粒含む。	外面淡褐色 内面赤褐色	複合口縁で，口縁下端にキザミを施す。口縁部に羽状縄文を施文後，棒状浮文を貼付する。内面の最終調整はヘラミガキ。のち赤彩。
2	壷		口縁～頸部	細砂，長石，スコリア，黒色粒子細粒含む。	内外面ともに赤褐色	複合口縁で，口縁下端にキザミを施す。口縁部に羽状縄文を施文。頸部はヘラミガキ。のち赤彩。内面の最終調整はヘラミガキ。のち赤彩。
3	壷	頸部径　最大径 〔11.4〕〔33.4〕〔36.8〕	口縁～胴下半	砂，長石，スコリア，黒色粒子細粒含む。	外面茶褐色 内面淡褐色	頸部に羽状縄文施文後，上下端を結節縄文で画す。胴部は山形文を施す。いずれの部位も無文部は赤彩。内面の器面調整は不明。火熱で焼けただれる。
4	壷		胴部	細砂，長石，スコリア，黒色粒子細粒を含む。	内外面ともに淡褐色	内外面とも器面が荒れており，調整は不明。 南関東系になるか。
5	壷		胴部片	細砂，長石，赤色スコリア，黒色粒子細粒含む。	外面暗褐色 内面淡褐色	予め意匠部分に羽状縄文を施文してから，山形文を描く。無文部には赤彩を施す（痕跡的）。
6	壷		胴部片	細砂，長石，スコリア細粒，黒色粒子細粒含む。	外面赤褐色 内面淡黄褐色	外面の調整はヘラケズリ後，ヘラミガキ。のち赤彩。 内面の調整はヘラケズリ後，ヘラナデを施す。
7	壷		胴部片	6と同様。	6と同様	6と同様。
8	壷		胴部片	6と同様。	6と同様	6と同様。
9	壷		胴下半～底部	砂，長石，スコリア，黒色粒子細粒含む。	外面赤褐色 内面黒褐色	胴下半はヘラケズリ後，ヘラナデ。のち赤彩。 内面の最終調整はヘラナデか。
10	甕	15.2　〔16.1〕	口頸部・胴部	細砂，長石，スコリア細粒，黒色粒子含む。	内外面ともに暗茶褐色	単口縁で，口唇をひだ状にする。頸部無文帯を構成し，胴部は附加条縄文を施文する。内面の口縁はナデ。胴部はヘラケズリ。
11	甕		口縁～頸部	細砂，長石，赤色スコリア細粒含む。	内外面ともに暗褐色	単口縁で，口唇をひだ状にする。頸部無文帯を構成する。それ以外はヘラケズリ後，ヘラナデ。内面はヘラナデか。火熱を受けている。
12	甕 （段甕）		頸部～胴上部	11と同様。	内外面ともに橙褐色	頸部は無文帯を構成し，胴部との境に段を有する。ヘラケズリ後ヘラナデ。 内面はヘラナデか。火熱を受けている。11と同一個体か。
13	甕		口縁部	10とほぼ同様。	10とほぼ同様	単口縁で，口唇をひだ状にする。 内面はナデ。10と胎土・焼成などは類似（本例は地文なし）。
14	甕		胴部	細砂，長石，スコリア細粒含む。	外面橙褐色 内面茶褐色	横位に一段の結節縄文を施し，その上下に附加条縄文を施文する。 内面はナデ調整（一見ハケナデ風）。
15	甕 （小形）	最大径 10　5.4　〔7.8〕	胴上部～底部	細砂やや目立つ。長石，スコリア細粒含む。	外面暗茶褐色 内面暗褐色	頸部との境に結節縄文を施し，胴部は附加条縄文を施文する。 内面はヘラケズリ後，ヘラナデ。
16	甕		頸部片	細砂，長石，スコリア細粒含む。	内外面ともに暗茶褐色	輪積み痕をそのまま残し，装飾とする。外面にススが付着している。 内面はナデ調整。　臼井南式土器。
17	甕 （段甕）		頸部～胴部	細砂，長石，赤色スコリア細粒を含む。	内外面ともに淡黄褐色	頸部との境に段を有し，キザミを施す。胴部はヘラナデ。 内面はヘラナデ後，部分的にヘラミガキ。
18	甕		胴部	18とほぼ同様。	内外面ともに淡黄褐色	外面の最終調整はヘラナデ。 内面の最終調整はナデ。
19	甕		胴部片	砂，長石，赤色スコリア細粒含む。	外面暗茶褐色 内面黒褐色	附加条縄文を羽状施文する。内面はヘラケズリ後，部分的にヘラミガキ。 「コゲ」が付着する。東関東系か。

06 D（第 18 図）　　（単位：㎝）

挿図番号	器種	口径　底径　器高	遺存	胎　土	色　調	手　法　上　の　特　徴
1	壷 器台	12.4　〔8.2〕	口縁～肩部	細砂，長石，スコリア，黒色粒子細粒含む。	外面淡褐色 内面赤褐色	複合口縁で，口縁下端にキザミ，口縁部に羽状縄文を施し，頸部は赤彩。 肩部は羽状縄文を施文する。内面はヘラミガキ。のち赤彩。器台に転用。
2	壷 器台	頸部径 7.5　〔9.7〕	口辺～頸部	ほぼ1と同様。	外面赤褐色 内面茶褐色	頸部はヘラミガキ，のち赤彩を施す。肩部は羽状縄文を施文し，上端を結節縄文で画す。内面はヘラケズリ後，ヘラミガキ。器台に転用。
3	小形甕	11.1　6.6　16.2	ほぼ完存	砂，長石，石英，雲母細粒を含む。	外面黒褐色 内面暗茶褐色	頸部に狭小な無文部を有し，口辺と胴部には附加条縄文を施文。口辺部に横位２列の刺突を施し，それをまたぐ形で縦位の貼瘤を付す。内面ヘラナデ。
4	甕 （段甕）	最大径 〔21.8〕〔20.8〕〔21.8〕	口辺・頸胴部	細砂，長石，赤色スコリア細粒含む。	外面黒褐色 内面暗茶褐色	単口縁で，口唇はひだ状。胴部と頸部の境に段を有し，キザミを廻らす。 頸部ナデ，胴部ヘラナデ。内面はヘラケズリ後，ヘラナデ。コゲが付着。
5	甕 （段甕）	最大径 〔24.6〕　〔14.6〕	頸部～胴下半	細砂，長石，スコリア，黒色粒子細粒を含む。	内外面ともに橙褐色	頸部と胴部の境に段を有する。調整はヘラケズリ後，ヘラナデ。 内面はヘラケズリ後，ヘラミガキ。　南関東系。
6	壷		胴部片	砂，長石，スコリア，黒色粒子細粒を含む。	外面橙褐色 内面淡褐色	外面の調整はヘラケズリ後，ヘラミガキ。のち赤彩。 内面の調整は器面が荒れていて，不明。南関東系。
7	甕 （壷か）		胴部片	細砂，長石，赤色スコリア，黒色粒子細粒含む。	外面茶褐色 内面暗褐色	外面の最終調整はヘラミガキ。 内面の最終調整はヘラナデ。南関東系。
8	壷		胴部片	砂，長石，スコリア，石英細粒を含む。	外面黒褐色 内面淡褐色	羽状縄文を施文してから，沈線で山形文を描き，磨消縄文にする。 内面の最終調整はヘラナデ。南関東系（胎土は在地系に近い）。
9	甕		胴部片	細砂，長石，スコリリア細粒を含む。	外面橙褐色 内面黒褐色	附加条縄文を施文する。 内面の最終調整はヘラナデ。
10	甕		胴部片	細砂，長石，石英，スコリア細粒を含む。	内外面ともに淡褐色	附加条縄文を施文する。 内面の最終調整はヘラナデか。
11	甕		胴部片	細砂，長石，スコリア細粒を含む。	内外面ともに茶褐色	附加条縄文を施文する。 内面はヘラケズリ後，ヘラナデ。
13	高坏		裾部片	細砂，長石，スコリア含み，黒色粒子少量含む。	内外面ともに橙褐色	裾部先端は折り返し状で，上端にキザミを施す。折り返して肥厚した部分に縄文を施文する。無文部に赤彩。内面の最終調整はヘラナデ。南関東系。

※ 12 は，再検討した結果，2 と接合したため，欠番扱いとした。

弥生土器遺物観察表（５）

07 D（第 20 図）　　（単位：cm）

挿図番号	器種	口径	底径	器高	遺存	胎土	色調	手法上の特徴
1	壷				口縁～頸部	細砂，長石，スコリア，黒色粒子細粒含む。	外面黒褐色 内面暗赤褐色	複合口縁で，口縁下端にキザミを施す。頸部は縦方向のヘラミガキ。赤彩の痕跡あり。内面はヘラミガキ。のち赤彩。
2	壷				頸部～肩部	細砂，長石，スコリア，黒色粒子細粒を含む。	外面赤褐色 内面橙褐色	頸部は羽状縄文を施文し，下端を結節縄文で画す。肩部はヘラミガキ。のち赤彩を施す。内面はヘラケズリ後，ヘラナデ。内外面とも摩滅が目立つ。
3	壷	最大径 〔35.8〕		〔11.9〕	肩部～胴中位	砂，長石，スコリア，黒色粒子を含む。	外面赤褐色 内面橙褐色	肩部は羽状縄文を施文後，上下端を３条の結節縄文で画す。頸部と胴部はヘラミガキ。のち赤彩。内面は器面の剥落が著しいが，赤彩あり。
4	壷				胴中位～下半	細砂，長石，赤色スコリア細粒，黒色粒子含む。	外面赤褐色 内面淡褐色	外面の最終調整はヘラミガキ。のち赤彩。 内面の最終調整はヘラナデ。
5	壷	最大径 〔17.4〕		〔8.5〕	胴部	細砂，長石，赤色スコリア細粒，黒色粒子含む。	内外面ともに茶褐色	外面の調整は器面が荒れていて不明。赤彩の痕跡あり。 内面はヘラナデあり。
6	甕				口縁部	細砂，長石，スコリア細粒を含む。	外面黒褐色 内面暗茶褐色	単口縁で，口唇をひだ状にする。口縁部はナデ。 内面の最終調整はナデ。9 と同一個体か。
7	甕				口縁片	細砂，長石，スコリア細粒を含む。	内外面ともに茶褐色	単口縁で，口唇をひだ状にする。頸部にかけて輪積み痕をそのままに残す。 内面の最終調整はヘラナデ。　臼井南式土器。
8	甕				口縁片	細砂，長石，スコリア微細粒含み，緻密。	外面灰褐色 内面淡褐色	複合口縁で，口縁の下端に刺突列を施す。口唇上にも縄文を施文。外面に赤彩を施す。内面の最終調整はナデ。
9	甕 （段甕）					細砂，長石，スコリア細粒を含む。	外面黒褐色 内面暗茶褐色	頸部は無文とし，胴部との境に段にキザミを廻らし，結節縄文を沿わせる。この直下から附加条縄文を施す。内面はヘラケズリ。6 と同一個体か。
10	甕				頸部～胴上部	細砂，長石，赤色スコリ細粒を含む。	内外面ともに茶褐色	頸部を無文とし，下端を結節縄文で画す。胴部は附加条縄文を施文。 内面の最終調整はヘラナデで，赤彩を施す。
11	甕	最大径 〔24.8〕		〔10.8〕	胴中位～下半	細砂，長石，スコリア細粒含む。	内外面ともに茶褐色	附加条縄文を施文後，部分的にヘラケズリを行う。 内面はヘラケズリ後，ヘラナデ。
12	甕				口辺部	細砂，長石，スコリア細粒を含む。	外面橙褐色 内面暗褐色	複合口縁で，口縁下端にキザミを施す。頸部は無文とする。 内面の最終調整はナデ。
13	甕				頸部	細砂，長石，スコリア細粒含む。	内外面ともに淡黄褐色	外面は附加条縄文を施文する。 内面の最終調整はヘラナデ。
14	甕 （段甕）				頸部～胴部	細砂，長石，スコリア細粒を含む。	外面暗褐色 内面茶褐色	頸部との境に段を有し，円形刺突を廻らす。胴部は附加条縄文を施文する。 内面の最終調整はヘラナデ（単なるナデツケか）。
15	甕				頸部～胴部	細砂，長石，赤色スコリア細粒を含む。	外面茶褐色 内面黒褐色	頸部は無文とし，胴部との境に刺突列を廻らす。胴部は附加条縄文を施文。 内面の最終調整はナデ。
16	甕				胴中位～下半	細砂，長石，赤色スコリア細粒を含む。	外面黒褐色 内面暗褐色	附加条縄文を施文する。ススが付着する。 内面はヘラ調整後，ナデ。
17	甕				肩部	細砂，長石，スコリア，雲母細粒を含む。	内外面ともに灰褐色	羽状縄文を施文後，横位の結節縄文で画す。 内面の最終調整はヘラナデ。南関東系。
18	甕				胴上部	細砂，長石，スコリア細粒を含む。	内外面ともに茶褐色	頸部との境に横位の結節縄文を施文し，胴部は附加条縄文を施す。 内面の最終調整はヘラナデ。
19	甕				胴部片	細砂，長石，赤色スコリア細粒を含む。	内外面ともに橙褐色	横位の結節縄文を施す。 内面の最終調整はナデ。
20	甕				胴部片	細砂，長石，スコリア細粒を含む。	内外面ともに茶褐色	附加条縄文を施文する。 内面はヘラケズリ後，ヘラナデ。
21	壷				胴部片	細砂，長石，スコリア微細粒を含む。	外面橙褐色 内面暗褐色	附加条縄文を施文する。 内面の最終調整はヘラナデ（ナデか）。
22	壷				胴部片	細砂，長石，スコリア細粒を含む。	内外面ともに暗褐色	附加条縄文を施文する。 内面の最終調整はヘラナデ。
23	甕				胴部片	細砂，長石，赤色スコリア細粒を含む。	外面暗茶褐色 内面暗褐色	附加条縄文を施文する。 内面はヘラケズリ後，ヘラナデ。
24	甕				胴部片	細砂，長石，石英，スコリア細粒を含む。	内外面ともに淡褐色	附加条縄文を施文する。 内面の最終調整はナデ。
25	甕				胴部片	細砂，長石，スコリア細粒含む。	外面黒褐色 内面暗褐色	外面はヘラケズリのちヘラナデ。 内面の最終調整はナデ（ユビナデ）。
26	広口壷				口縁～頸部	細砂，長石，スコリア，黒色粒子細粒含む。	内外面ともに赤褐色	複合口縁で，口縁下端にキザミを施し，口縁部は縄文を施文。頸部はヘラミガキのち赤彩。内面の最終調整はヘラミガキ。のち赤彩。　南関東系。
27	埦か				口縁～頸部	細砂，石英，雲母，黒色粒子細粒を含む。	内外面ともに淡褐色	複合口縁で，口縁下端にキザミを施し，口縁部は縄文施文。 内面の最終調整はヘラミガキ。のち赤彩（痕跡）。南関東系。
28	甕	9		〔2.6〕	胴下半～底部	細砂，長石，スコリア細粒を含む。	外面茶褐色 内面暗茶褐色	胴下半は附加条縄文を施文する。底部は木葉痕あり。ヘラ調整を施す。 内面はヘラケズリ後，ヘラナデ。
29	甕	6.2		〔2.2〕	胴下半～底部	細砂，長石，スコリア細粒を含む。	外面赤褐色 内面黒褐色	胴下半はヘラナデ。のち赤彩。底部はヘラナデ。 内面はヘラケズリ後，ヘラナデ。本例は南関東系になるか。
30	甕 （甑か）	〔5.4〕		〔2.7〕	胴下半～底部	砂，長石，赤色スコリア粒を含む。	内外面ともに茶褐色	胴下半はヘラケズリ後，ヘラナデ。底部中央に焼成後穿孔あり。 内面は器面が荒れていて調整不明。本例は「転用甑」になるか。

弥生土器観察表（６）

08 D（第 21 図）　　（単位：cm）

挿図番号	器種	口径	底径	器高	遺存	胎土	色調	手法上の特徴
1	甕				口縁～頸部片	細砂，長石，スコリア細粒を含む。	外面黒褐色 内面暗褐色	外面はごく目の細かいハケナデ調整。ススが付着する。 内面はヘラケズリ後，ナデ。
2	甕				頸部片	細砂，長石，スコリア細粒を含む。	外面暗褐色 内面淡褐色	外面の最終調整はナデ。ススが付着する。 内面の最終調整はナデ。
3	甕				胴下半～底部	細砂，長石，スコリア細粒を含む。	外面暗褐色 内面淡褐色	胴下半はヘラケズリ後，ヘラナデ。底部はヘラ調整。 内面はヘラケズリ後，ヘラナデ。

09 D（第 22 図）　　（単位：cm）

挿図番号	器種	口径	底径	器高	遺存	胎土	色調	手法上の特徴
1	広口壺	〔21.8〕		〔10.4〕	口縁～胴上部	細砂，長石，赤色スコリア，黒色粒子細粒含む。	外面暗赤褐色 内面橙褐色	複合口縁で，口縁下端に指頭圧痕を廻らす。頸部無文帯に赤彩。胴部との境は段を有し，羽状縄文施文。胴部は赤彩。内面はヘラミガキ。のち赤彩。
2	甕				胴部片	細砂，長石，スコリア細粒を含む。	外面橙褐色 内面暗褐色	外面はヘラケズリ後，ヘラナデ。 内面はヘラケズリ後，ヘラナデ。
3	甕				胴下半～底部	細砂，長石，赤色スコリア細粒を含む。	外面橙褐色 内面黒褐色	外面はヘラケズリ後，ヘラナデ。 内面はヘラケズリ後，ヘラナデ。
4	甕				胴部片	細砂，長石，スコリア細粒を含む。	内外面ともに茶褐色	附加条縄文を施文する。 内面はヘラケズリ後，ヘラナデ。

01 M（第 23 図）　　（単位：cm）

挿図番号	器種	口径	底径	器高	遺存	胎土	色調	手法上の特徴
1	壺				肩部片	細砂，長石，スコリア細粒を含む。	外面赤褐色 内面淡褐色	羽状縄文の施文域以外はヘラミガキ。のち赤彩。 内面の最終調整はヘラナデ。
2	壺				肩部片	細砂，長石，石英，スコリア細粒含む。	外面暗褐色 内面茶褐色	細かな羽状縄文を重畳施文する。 内面の最終調整はヘラナデ。
3	壺				肩部片	2 と同様。	2 と同様	2 と同様。 2 と同一個体。
4	甕				肩部か	細砂，長石，赤色スコリア細粒含む。	内外面ともに茶褐色	外面は附加条縄文をやや疎らに施文する。 内面はヘラケズリ後ヘラナデ。
5	甕				胴部	細砂，長石，スコリア細粒含み，緻密。	内外面ともに暗茶褐色	ヘラケズリ後，部分的にヘラミガキ。 内面はヘラケズリ後ヘラナデ。
6	甕				胴下半～底部	細砂，長石，スコリア細粒含む。	外面赤褐色 内面黒褐色	胴下半はヘラケズリ後，ヘラナデ。のち赤彩。底部は木葉痕あり。 内面はヘラケズリ後，ヘラナデ。

第３章　殿台遺跡 a 地点の調査

第１節　調査の概要

都市計画道路３・４・９号線は，平沢・殿台地区を北西－南東の方向に縦断する形で設定されている。そのため，本遺跡の西側部分を道路が分断することになる。

調査は道路幅で，さらに部分拡張という，極めて限定されたものであったが，旧石器時代の遺物集中箇所２地点，時期不明の土坑２基（うち１基は井戸状のもの）が検出された。遺物は旧石器，縄文土器，奈良時代須恵器，江戸時代在地系土器が出土した。

第２節　旧石器時代

下層調査の結果，遺物集中箇所が２地点検出された。

1. 遺物集中箇所

集中箇所１（第 25 図）

K1-12・K2-9 グリッドにまたがる。台地上平坦面からやや斜面にかかる付近である。

産出層準は立川ローム層Ⅲ層下部～Ⅳ層上部に相当する。

石器類は長径 3.8m，短径 2.0m の範囲に分布する。平面分布的には散漫で，垂直分布的にはややばらつきが認められる。

第 25 図の土層断面図は西壁で作成したものである。

遺物は石器類６点が出土した。このうち３点を図化した。

出土遺物（第 25 図）

1・3 は使用痕のある剥片。**1** は片側の側縁を中心に，使用による「刃こぼれ」が見られる。**3** は原礫面を一部残す。片側の側縁に使用による「刃こぼれ」が見られる。**2** は剥片（打面調整剥片）か。背面は剥離面のままで，表側には剥片の剥離面が数箇所認められる。石材は **1・3** がチャート，**2** は珪質頁岩。

集中箇所２（第 25 図）

K2-10・11 グリッドにまたがる。台地上平坦面からやや斜面にかかる付近である。

産出層準は立川ローム層Ⅲ層下部～Ⅳ層上部に相当する。

石器類は長径 1.85m，短径 1.2m の範囲に分布する。平面分布的には散漫で，垂直分布的にはややばらつきが認められる。第 25 図の土層断面図は西壁で作成したものである。

遺物は石器類３点が出土した。このうち１点を図化した。

出土遺物（第 25 図）

4 は剥片。背面に一次剥離面が見られる。石材はチャートか。

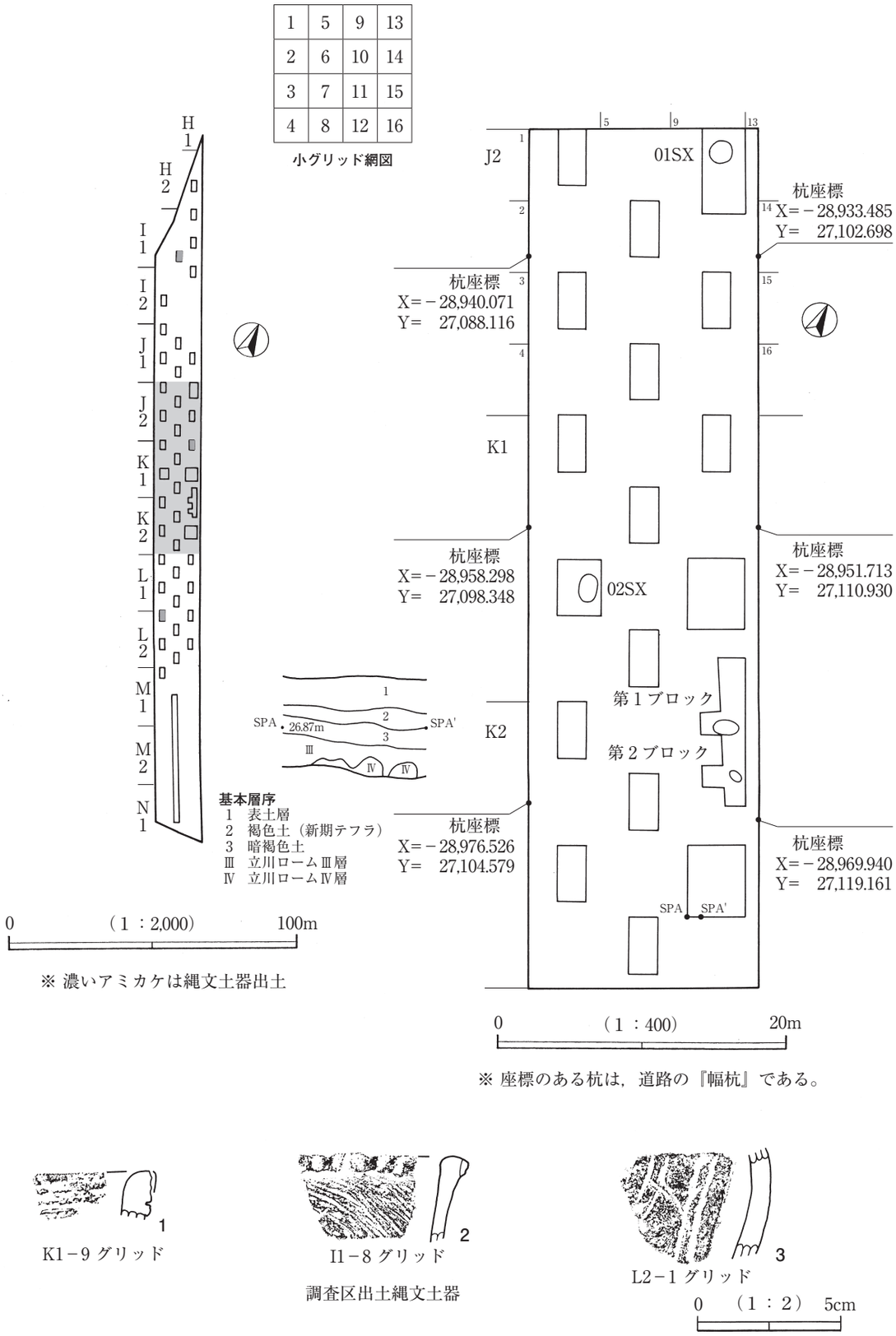
5 のみ遺構外出土石器で，使用痕のある剥片。石材はチャートか。

第３節　縄文時代

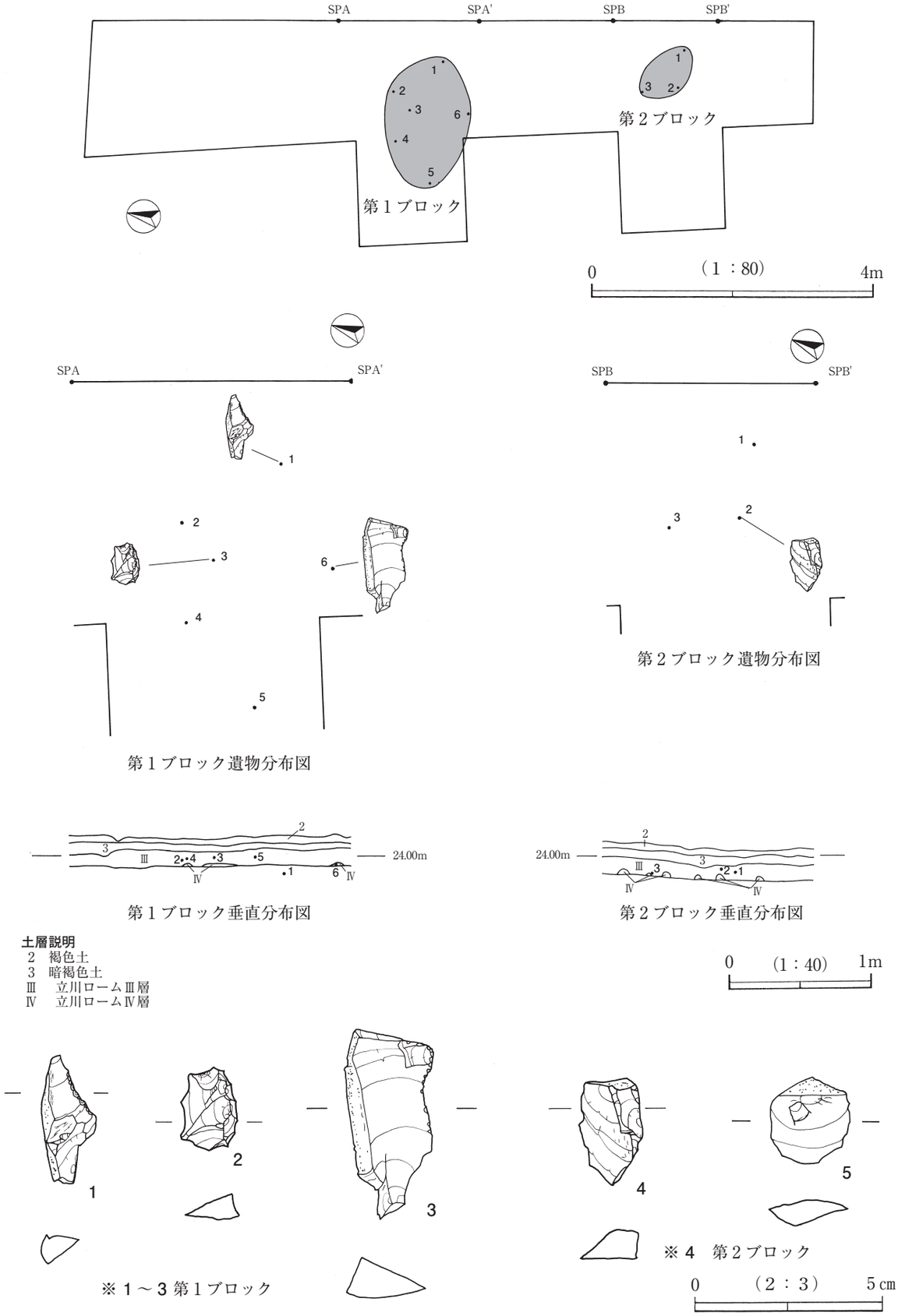
縄文時代の遺構は検出されなかったが，縄文土器３点が出土している。

1. 縄文土器（第 24 図）

1 は横位の平行沈線を重畳施文した口縁片で，加曽利Ｂ式土器か。**2** は右下がりの条線を地文とし，口縁部に紐線を貼付，この後連続圧痕を施した口縁片。加曽利 B2 式～ B3 式の紐線文系粗製土器である。**3** は半截竹管などの内側を用いた平行沈線を施文する。堀之内式土器。



第 24 図　殿台遺跡遺構配置図・出土縄文土器



第 25 図　旧石器時代の遺構・遺物

第４節　奈良時代～江戸時代

今回の調査で，遺構に伴うものではないが，奈良時代及び江戸時代に相当する時期の遺物が出土している。また，遺物を伴わない土坑２基が検出されているので，ここに報告したい。

1. 調査区出土遺物（第 26 図）

1 は須恵器で，甑（五孔式）の底部片。胎土に石英・雲母細粒を含み，常陸産（奈良時代）。

2 ～ **5** は在地系土器で，江戸時代の所産。**2**・**3** は土師質であるが，比較的硬く焼き締められている。**2** は胴下半～底部片。外面に回転台などによる調整が認められ，内面はヘラケズリ後，ヘラナデ。器形的には甕になるか。**3** は甕の胴部片。最終的な器面調整は，内外面ともヘラナデで，特に内面は丁寧に行われ，ヘラミガキに近い光沢がある。

4 は焙烙の口辺部片。外面はロクロないし回転台による調整が認められる。胎土は細砂・長石・赤色スコリア・雲母細粒を含む。表裏とも耕作時の農具による損傷（鍬などの傷跡）がやや目立つ。

5 は「かわらけ」の小皿の底部片。ロクロ成形で，底部切り離しは回転糸切り，切り離し後無調整。見込み面（内面）はロクロなで。内外面とも橙褐色を呈し，器壁は厚さが３～ 4mm を測り，薄手に仕上げている。胎土は細砂・長石・スコリア微細粒を含み，緻密である。

2. 土坑

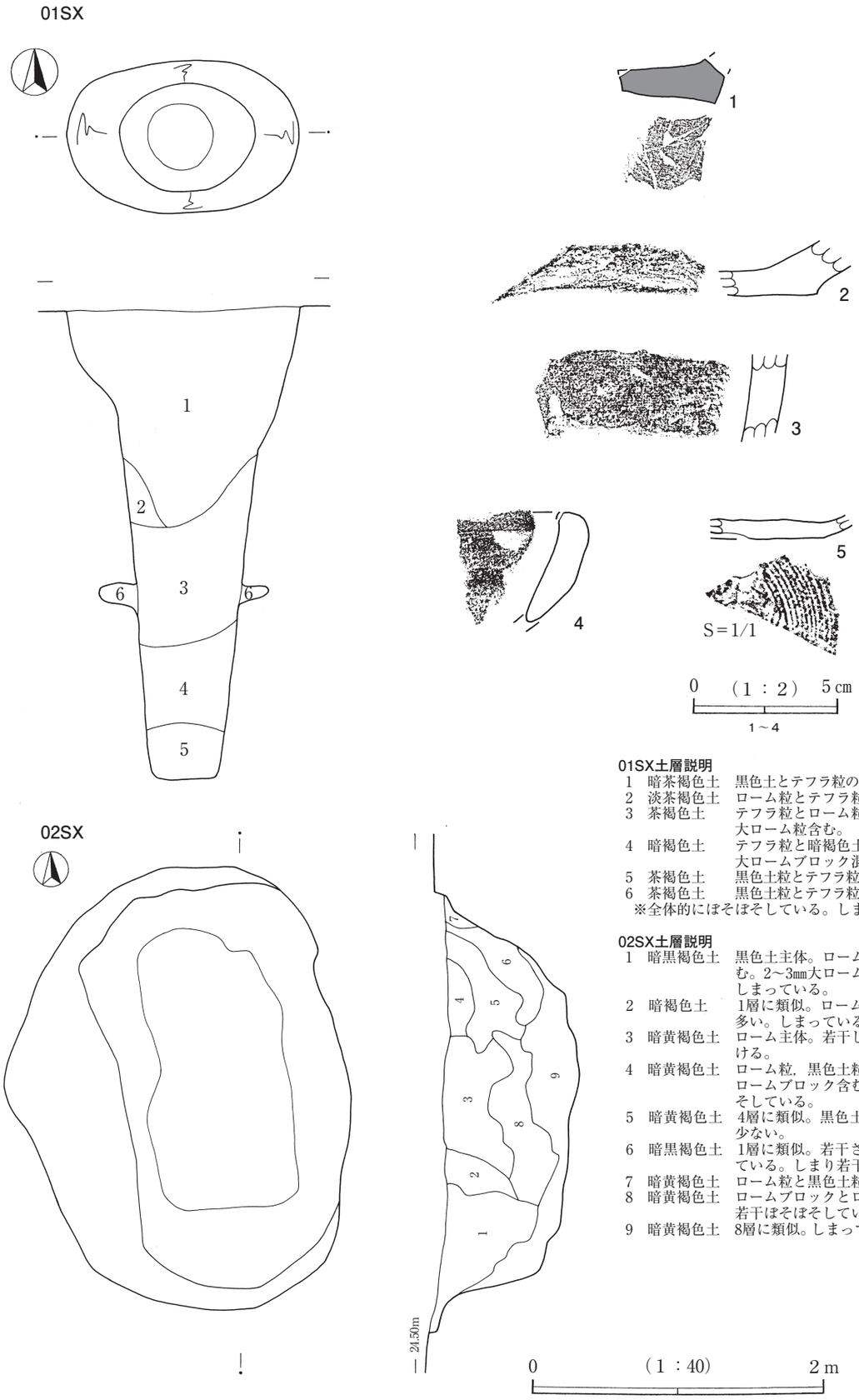
01SX（第 26 図）

位置　J2-9 グリッドで検出された。**重複関係**　単独。**長軸**　N-88°-W。**平面形**　上部は楕円形，中段以下は円形を呈する。**壁・底面**　壁の中段から上はややゆるやかに立ち上がり，下は垂直気味に掘り込まれる。深さ約 1.95m 前後の壁面に，「足場状の小穴」が掘られている。底面の壁際はやや丸みを帯びるが，全体的に比較的平坦である。**規模**　1.61m × 1.12m，底部の径が 0.45m，検出面からの深さは，最深部で 3.45m を測る。**覆土**　6 層に分層できた。全体にボソボソで，しまりに欠ける。**出土遺物**　出土しなかった。**備考**　本跡は，形状的に見ていわゆる「井戸状遺構」である。ただし，掘り下げ中に水が湧き出すことはなく，土層観察の結果では，かつて水を湛えていた形跡は認められなかった。従って，現状で「井戸」であると認定するには，困難な要素がある。とはいえ，これだけの規模，深度を有するという点は特筆すべきもので，かつ「井戸」に代わるべき機能もまた，現状では見当たらない。

なお，本跡は中段までは手掘りで半裁したが，この後ピンポールを使用して深度と壁面の状態を探索したところ，全く底面に達しないばかりか，壁面はほぼ垂直に下がって行く状況が確認された。調査期間の都合上，中段より下部は重機を用いて半裁し，大急ぎで断面図作成と断面写真を撮影した。結局，深度が 3m を越えていること，かつ幅が 0.5m 前後しかないということも合わせ，安全面を最重視して，完掘を断念するに至った。

02SX（第 26 図）

位置　K1-3・K1-7 グリッドにまたがる。**重複関係**　単独。**長軸**　N-8°-W。**平面形**　上部，底部とも不整な隅丸長方形を呈する。**壁・底面**　南壁を除いて，比較的垂直気味に立ち上がり，底面は凹凸に富む。規模　3.12m × 2.25m，検出面からの深さは 0.98m を測る。**覆土**　9 層に分層できた。暗黄褐色土を主体とする，埋め戻し土である。**出土遺物**　出土しなかった。



01SX土層説明

1　暗茶褐色土　黒色土とテフラ粒の混合層。
2　淡茶褐色土　ローム粒とテフラ粒。
3　茶褐色土　テフラ粒とローム粒。5～7㎜大ローム粒含む。
4　暗褐色土　テフラ粒と暗褐色土粒。 2cm大ロームブロック混入。
5　茶褐色土　黒色土粒とテフラ粒混合層。
6　茶褐色土　黒色土粒とテフラ粒混合層。
※全体的にぼそぼそしている。しまりなし。

02SX土層説明

1　暗黒褐色土　黒色土主体。ローム粒少量含む。2～3㎜大ローム粒混入。しまっている。
2　暗褐色土　1層に類似。ローム粒の割合多い。しまっている。
3　暗黄褐色土　ローム主体。若干しまりにかける。
4　暗黄褐色土　ローム粒，黒色土粒混合層。ロームブロック含む。ぼそぼそしている。
5　暗黄褐色土　4層に類似。黒色土粒の割合少ない。
6　暗黒褐色土　1層に類似。若干さらさらしている。しまり若干かける。
7　暗黄褐色土　ローム粒と黒色土粒。
8　暗黄褐色土　ロームブロックとローム粒。若干ぼそぼそしている。
9　暗黄褐色土　8層に類似。しまっている。

第 26 図　01SX・02SX 実測図及び調査区出土遺物

第４章　成果と課題

第１節　平沢遺跡ａ地点

1. 縄文時代の様相

縄文土器について

確認調査の遺物を含めると，早期中葉～後期前葉までの間の資料が，総計 54 点抽出できた。

その内訳は，田戸下層式２点・条痕文系土器３点・黒浜式７点・前期末葉縄文系粗製土器１点・阿玉台Ⅲ式１点・加曽利ＥⅠ式 14 点（同一個体を除くと７点）・称名寺Ⅰ式 15 点・堀之内１式９点・不明２点である。

この中で，数量的にややまとまりがある称名寺式土器に関して，少し触れてみたい。

口縁部を有する資料のうち，第４図 **13** はＪ字文が横位に連携する属性から，Ⅰｂ式（旧７段階区分の第３段階）に比定[1)]できる。同図 **14・15** は，Ｊ字文の横位連携帯が消失したもので，Ⅰｃ式（旧７段階区分の第４段階）に比定できよう。胴部片は **16** がⅠｂ式で，**17** ～ **19** はⅠｃ式に比定したい。近隣では，本遺跡と西谷津を挟んで対峙する阿蘇中学校東側遺跡でも，Ⅰｂ式を含む資料が出土している。

今回の一番の成果は，「縄文時代の遺跡としての平沢遺跡を提示できた」ことである。

2. 弥生時代の様相

弥生土器について

今回はごく大雑把に，「南関東系」・「在地系」・「複合口縁系」・「東関東系」・「その他」・「不明（地文縄文の胴部片など）」という，六群に分類した。

「南関東系」

各住居跡から出土しており，安定した存在であった。器種的には装飾壷（サイズは大・中・小あり）を中心に，広口壷・高坏・甕（無台のみ）が見られる。

時期については，大村　直氏が用いたところの[2)]，文様帯の区画技法の「帯縄文沈線区画」と「結節区画」という区分原理に従い，前者を「久ヶ原式土器」，後者を「山田橋式土器」とする。今回の資料は，そのほとんどが「結節区画」によるもので，大別としては「山田橋式土器」に比定されるものと考えられよう。従って，時間的な大枠としては，弥生時代後期後半～終末として捉えられる。これを高花宏行氏の編年（以下，高花編年とする）に当てはめると，Ⅲ期～Ⅳ（ａ・ｂに細分）期[3)]に相当しよう。

「在地系」

狭義の「臼井南式土器＝素口縁＋頚部輪積痕＋頚部下端Ｓ字状結節文＋胴部附加条縄文」に対して，仮にそう呼んでおきたい。今回の資料中，口辺部に限定すると，第 14 図 **15**（04D），第 16 図 **16**（05D），第 20 図 **7**（07D）の３点のみであった。このうち，07D のものは輪積痕の段が明瞭で，04D・05D のものは輪積痕がナデ消され気味になっていることから，前者は「臼井南式」前半段階，後者が「臼井南式」後半段階に比定される。これを高花編年に当てはめると，前者がⅡ期，後者がⅢ期となろう。

「複合口縁系」

複合口縁という属性自体は，北関東（下野地域）の「二軒屋式土器」などに系譜が辿れるものであるが，東関東（常総地域）でも盛行した。今回も各住居跡から出土し，安定した存在の土器群と言える。

非常に雑駁な観察であるが，今回の資料は，第７図 **9**（01D）を除き，いずれも口縁の段が低平化しているもので，頚部下端にＳ字状結節文を数条施す。低平化した段自体は新しい様相を示すが，Ｓ字状結節文（結節縄文）は高花編年のⅡ期に盛行する属性である。ただし，01D や 04D ではより新しい土器と共に出土しており，前代の混入とは見なし難いものがあった。栗谷遺跡 A142 では，下大津式土器

と共に頚部下端にＳ字状結節文を施文した甕が出土している。少ないながらも，こうした事例が確認されているので，高花編年のⅣａ期まで，Ｓ字状結節文を施す伝統が残存した可能性が高い，と解釈した方が良さそうである。Ｓ字状結節文自体は，「東関東系」にも施文された例があり，これを裏づけている。

「東関東系」

05D から附加条縄文を羽状施文した破片（第 16 図 **19**）が出土した他，04D 及び 06D から，形のわかる甕が計２個体出土した。その属性はいずれも，

「頚部無文帯を挟んで，口辺と胴部に地文として附加条縄文を施文する。この後，口縁下に横位二列の円形竹管による刺突列を施し，それをまたぐ形で縦長の貼瘤（瘤状の突起）を廻らせる。」

というものである。この属性から，「仮称　根鹿北式土器」に位置づけられる。両者の相違点は，06D 例のみ胴部に横位の結節縄文が施されている。そして，胎土には雲母・石英の細粒が目立つ点などから見て，少なくとも，04D 例は搬入品である可能性が高い。両者とも，時期的には高花編年のⅣａ期に相当しよう。

「その他」

第７図 **11**（01D）の「口唇上にキザミを施し，口縁下に一列の小径円形刺突を廻らし，頚部には２列１組の小径円形刺突を垂下する」ものや，同図 **14** ～ **16** の「区画内に格子目文を充填した，壷形土器の頚部」などを含む。前者は，一見すると縄文中期初頭の資料に類似するが，胎土・焼成その他から見て，弥生式土器で間違いはない。この類例とは言い難いものの，「口唇部に細かなキザミを施し，口辺に小径の円形刺突を施文するもの」であるならば，茨城県稲敷郡美浦村野中遺跡第３号土坑の資料（報告書挿図第 11 図 45）にあり，弥生後期の土器群と共に出土している。いずれにせよ，今後類例の増加が待たれる。

後者は，高花編年のⅠｂ期のメルクマールとなる属性である。ただ，東関東の霞ヶ浦沿岸では「仮称　根鹿北式土器」の直前まで見られる属性なので，実態は単純ではない。しかも，石英粒子の目立つ胎土は他になく，時期的に後期初頭となると本例のみとなるため，時間的な位置づけには慎重を期したい。それ故，今回は時期の決定を保留したいが，この点は研究者諸賢の御寛恕を乞うものである。

さらに，「南関東系の属性を有しつつ，胎土が在地のもの（第 11 図 **17**・第 18 図 **4**）」などは，はじめに記した五群のうち，「南関東系」では扱わず，さりとて「在地系」でも扱わなかった。それが，本群に含めた所以である。これらをいかに捉えるか，それに関しては課題が残ってしまったと言えよう。

「不明」

附加条縄文を地文として施した甕の胴部片は，出土資料のかなりの割合を占める。これは，「在地系」・「複合口縁系」にほぼ共通する属性であるため，そのいずれに該当するのか，今回は限定できなかった。

以上をまとめると，今回の資料は，高花編年のⅢ期～Ⅳａ期を中心に，一部Ⅱ期を含むと言えよう。

竪穴住居跡の時期と集落

ここでは，前節の内容（弥生土器の検討）を踏まえ，主に「南関東系」を「大村編年」，「東関東系」は「小玉編年」に対比しつつ，「高花編年」の区分に位置づけることで，竪穴住居跡群の時期決定を行う。さらに，そこから最終的には集落のあり方を考えてみたい。

01D は，第７図 **1** の南関東系装飾壷よりも新期である。**1** は器面の摩滅・剥落が目立つだけでなく，5 層と 4b 層の両層に廃棄されていたため，01D の住人が使用していた器ではない。この壷は，帯縄文が多段化（多帯化）しており，頚部がしまった細頚の器形などから見て，「山田橋Ⅰ式」に位置づけられる。そして，住居跡の時期はこれよりも後であるため，「山田橋Ⅱ式期」＝高花編年Ⅳａ期に相当しよう。

02D は，古墳時代前期の時点でいまだ埋没途上であった，としか言えない。詳細な時期は不明である。

03D は，床面遺棄・廃棄遺物はないが，廃屋に伴う廃材の焼却処理行為後の，消火活動（土砂投棄）直後に土器類の廃棄を集中して行っており，その大半は住人の廃品であった可能性が高い。第 11 図 **5** の高坏が「山田橋Ⅱ式」に位置づけられるため，住居跡の時期は高花編年Ⅳａ期としたい。

04BD は，「仮称　根鹿北式土器」もさることながら，第 14 図 **2** の甕は輪積痕を残し，最下段に押捺痕を有さない点などから，「山田橋Ⅱ式」の段階に比定されよう。住居跡の時期は高花編年Ⅳａ期。

04AD は，04BD を破壊することから，今回の中では一番新しい（最後）住居となる蓋然性が高い。

05D は，第 16 図 **1** の南関東系装飾壷の口縁部形態に見られる属性が，「山田橋Ⅰ式」に位置づけられることから，住居跡の時期は高花編年Ⅲ期に相当する。

06D は，床面に遺棄された「仮称　根鹿北式土器」を時期決定資料とし，高花編年Ⅳａ期に比定する。「転用器台」として再生した２個体の壷（第 18 図 **1･2**）をはじめ，高坏（同図 **13**）や甕（同図 **5**）も「山田橋Ⅱ式土器」に位置づけられるので，矛盾しない。これらと甕（同図 **4**）を組み合わせたものが，概ね「土器組成」であったと思われる。そして，「転用器台」の事例が示すように，06D の住人の居住期間は，高花編年Ⅳａ期の存続期間でもある訳で，その時間幅がいかなるものであれ，それよりも短くなることはない。即ち，高花編年Ⅳａ期は，06D の２個体の壷が，「壷としての使用期間→転用器台としての使用期間」という時間幅を，最低有することになるのである。

07D は，廃屋に伴う廃材の焼却処理行為後の，消火活動直後に土器類の廃棄を集中して行っており，これは周堤が残っている時点であるため，住人の廃品であった可能性が高い。第 20 図 **1** の壷の口縁部形態に見られる属性は，「山田橋Ⅰ式」のものであるが，同図２を含めて，破片が摩滅している。その点を考慮すると，住人の時期はより新しくなるため，「山田橋Ⅱ式期」＝高花編年Ⅳａ期に相当しよう。

08D は，判断材料となる土器が少な過ぎるため，詳細な時期は不明とせざるを得ない。

09D は，第 22 図 **1** の広口壷の口縁部形態に見られる属性が，「山田橋Ⅱ式」に位置づけられることから，住居跡の時期は高花編年Ⅳａ期（ないしはそれ以降）に相当しよう。

集落の変遷であるが，時期的には四期に分かれよう。

１期（高花編年Ⅱ期）……　今回は該当遺構なし（土器片のみ出土）
２期（高花編年Ⅲ期）……　05D
３期（高花編年Ⅳａ期）……　01D・03D・04BD・06D・07D・09D
４期（高花編年Ⅳａ期以降）……　04AD

１期　今回は土器片のみであるが，未調査部分に埋まっているものと解釈した。

２期　05D1 軒のみの検出であるが，未調査部分に埋まっている可能性は否定できない。なぜならば，出土土器の中には「山田橋Ⅰ式土器」も，少なからず認められるからである。この点を加味すると，今回の調査区は，該当期の住人が好んで居住するエリアではなかったと捉えられる。

３期　集落が最も栄えた時期である。６軒の全てが同時存在であるかは不明としても，その居住形態は「大形住居」と「小形住居」の二者が見られ，主軸方向もほぼ同一となっている。この時期は，印旛沼南岸・西岸とも遺跡数（遺構数）が減少するという傾向がある。逆に霞ヶ浦西岸などでは，大規模な集落が営まれるようになる。八千代市域では，島田台の平戸道地遺跡で比較的大規模な集落が検出されている。村上台では，本遺跡を除けば，栗谷遺跡で２軒，上谷遺跡で３軒が検出されたのみである。

４期　04AD が，全ての住居跡の中では一番新しいことから，設定した。この住人は，廃品類を何も残さずに立ち去ったと思われる（移住ないしは移転）。また，02D の覆土中に廃棄された，古墳時代前期土師器（ひさご形土器）を見る限り，該当期の集落もどこかに埋まっている可能性が極めて高い。

阿蘇中学校東側遺跡との関係

本遺跡と西谷津を隔てて対峙する阿蘇中学校東側遺跡（以下では阿蘇中とする）は，弥生時代後期を中心とする集落遺跡である。阿蘇中は，霊園造成や道路建設に先立ち，過去５次に及ぶ調査が行われており，竪穴住居跡計 20 軒以上[4]が検出された。本来的には，規模の大きな集落であった可能性が高い。報告書を見る限りでは，出土土器に南関東系が比較的目立つ点など，本遺跡と共通項も少なからずある。

第一次 001 住居址・第三次第 21 号住居址の壷は「帯縄文沈線区画」の技法を持ち，第一次 006 住居址の広口壷は口縁部形態から「久ヶ原式期」に位置づけられる。また，第三次第 19 号住居址の甕は，頚部と胴部の境に段を有し，段上に横位の結節縄文を多条化施文しており，本遺跡の第７図９（01D）と近似する資料である。従って，あくまでも予察であるが，阿蘇中は高花編年のⅡ期から集落が盛行し，Ⅲ期までは本遺跡と併存した可能性が高く，Ⅳ期（Ⅳａ期）の前に廃絶したのではないかと考えられる。

次に，谷津田の経営に関してであるが，阿蘇中と本遺跡は南田谷津と西谷津を共有することから見て，地縁的にも無関係ではないと思われる。両者に共通することは，谷奥に営まれた大規模集落ということである。ただし，南田谷津と西谷津自体が比較的幅員の狭隘な谷津であるため，水稲耕作を行ったところで，米自体の収穫量はあまり期待できなかった可能性が高い。にもかかわらず，比較的大規模な集落が隣り合うように営まれ，ある期間は併存しているという点に，むしろ留意するべきであろう。

要は，「両者（両集落）が平和裏に共存」して行くための経済基盤は何か，ということであって，それを解明することは，今後の課題の一つである。

弥生時代後期集落と古墳時代前期集落との関係

既に，村上台における弥生時代後期の遺跡分布状況は，第１図に示した。

第１章第３節の補足となるが，弥生時代中期後半の遺跡分布は，

⑥栗谷遺跡・⑦上谷遺跡・⑬逆水遺跡・⑮村上宮内遺跡・⑱浅間内遺跡

の５個所であったのに対し，後期になると実に四倍以上に増加している。

そして，その立地もまた，印旛沼や新川に面した台地先端付近だけでなく，本遺跡のように谷津の奥まった部分の台地上や，「保品・神野遺跡群」でのいわゆる「弥生ベルト」に見られるような，尾根上や台地の鞍部など，様々なあり方を示すようになる。特に後者の立地は，「水稲耕作を生業にした集団」が集落を営むのには，適しているとは言い難いのである。やはり，この事象の背景には「人口の増加」とそれに伴う「拡散」を考慮する必要があると思われる[5]。

さらに付け加えると，水稲耕作をメインとした生業のみならず，他の栽培作物に比重を置くことや，少なからず出土する土製紡錘車の評価として，「布」を生産するなどの「新たなる産業の萌芽」を認めることができよう。それでいて，「印旛沼周辺地域」というように，エリアを拡大して見た場合は，「小地域圏の分化」と，「土器の表象に脱南関東化」が見られるという，二律背反的な側面を持つ。

ところが，弥生時代の終末には，人口の減少と見なせる程に遺跡数が少なくなるのである。そして，この状況は次の古墳時代の初頭（古墳出現期）にも続いている。この点は留意しておきたい。

大枠なタイムスケールの上での「弥生時代後期～古墳時代前期」で見た場合，集落が営まれている例は，境堀遺跡・向境遺跡・栗谷遺跡・上谷遺跡・おおびた遺跡・南谷遺跡・村上宮内遺跡の７箇所を数える。ところが，確実に弥生時代終末と古墳時代初頭の両時期にまたがって，遺構・遺物が検出されているのは，栗谷遺跡のみである[6]。その点で本遺跡は，前々項と前項で触れたように，04D 及び 06D から，東関東系の上稲吉式土器直前とされる，「仮称　根鹿北式土器」の小形甕及び中形甕と，南関東系の「山田橋式土器」に比定される装飾壷が共伴しており，時期的に高花編年Ⅳａ期，即ち弥生時代の終末（最終末ではないが）に近いという点で注目される。さらに，02D 覆土から古墳時代前期初頭の「ひさご形土器」も出土している。

南谷遺跡の報文でも触れたように（中野他 2009），遅くとも古墳時代前期後半頃になると，大きな谷

津(支谷)を囲む形で遺跡群が,「地縁的な共同体」を形成するようになってくる。その背景の一つとして,「水稲耕作の再開」が想定された。即ち，集団の統廃合が行われた可能性を示すものである。

南谷遺跡報文の繰り返しになるが，やはり古墳時代を迎えると,「弥生時代的な集落・集団の結びつき（紐帯)」そのものに変化が生じたものと解釈されよう。

第２節　殿台遺跡ａ地点

1. 旧石器時代及び縄文時代の様相

今回の石器群は，産出層準から見て，橋本勝雄氏によるところの,「萱田遺跡群Ⅰ期」に相当しよう。資料的には少量の出土であるが，文化層のわかる事例が増加したことは，成果として上げてよい。

縄文土器は，やはり少量であるが，隣接する平沢遺跡と時期的に重複しないものを含む。後期中葉加曽利Ｂ式期になると，生活エリアに変化が生じた結果を示している可能性がある。

2. 井戸状遺構

「井戸状遺構」は，その形状こそ「井戸」に酷似するが，深度的に地下水の層に達しておらず，覆土の観察からも水を湛えていた形跡は見つからなかった。類例の増加を待って，再検討すべきであろう。

注

1）近年，鈴木徳雄氏により，７段階区分の発展的解消としての，新たな細分案が発表されたため，報告者もこれに従うことにしたい。
　鈴木徳雄　2007 「称名寺式土器研究の諸問題」『第 20 回　縄文セミナー　中期終末から後期初頭の再検討　資料集』
　　縄文セミナーの会　１頁～８頁
2）大村　直　2004 「市原市山田橋大山台遺跡」 財団法人　市原市文化財センター
3）高花宏行　2007 「〔臼井南式〕と周辺土器様相の検討」『研究紀要』5　財団法人　印旛郡市文化財センター　27 頁～ 50 頁
4）八千代市教育委員会による，第二次調査の発掘調査報告書の刊行により確定することとしたい。
5）加藤修司　2008 「第三章　弥生時代の八千代　第二節　農村の分散と個性化（弥生時代後期)」『八千代の歴史（通史編　上)』
　　八千代市史編さん委員会　138 頁～ 141 頁
6）弥生時代終末の遺構・遺物のみは上谷遺跡，古墳時代初頭の遺構・遺物は殿内遺跡，遺物のみならば南谷遺跡で検出されている。しかし，ここではあくまでも，弥生時代終末と古墳時代初頭の両方の時期にまたがる，という点にこだわるものである。

参考文献（年代順）

星　忠他　　1980 「阿蘇中学校東側遺跡」 八千代市遺跡調査会
藤原　均他　1984 「千葉県八千代市　阿蘇中学校東側遺跡Ⅲ」 八千代市遺跡調査会
中村哲也　　2000 「茨城県稲敷郡美浦村　野中遺跡　－第２次発掘調査報告書－」 美浦村教育委員会
森本和男　　2007 「八千代市向境遺跡・雷遺跡・阿蘇中学校東側遺跡」 千葉県県土整備部　財団法人千葉県教育振興財団
小玉秀成　　2007 「塔ヶ塚古墳群の弥生土器」『小美玉市史料館報 Vol.1』 小美玉市史料館　115 頁～ 127 頁
中野修秀他　2009 「千葉県八千代市　南谷遺跡発掘調査報告書」 八千代市教育委員会

報　告　書　抄　録

ふりがな	ちばけんやちよし　ひらさわいせきえーちてん・とのだいいせきえーちてん
書名	千葉県八千代市　平沢遺跡ａ地点・殿台遺跡ａ地点
副書名	都市計画道路３・４・９号線建設地内埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	中野修秀・森　竜哉
編集機関	八千代市教育委員会
所在地	〒276-0045　千葉県八千代市大和田138-2　　TEL.047（483）1151　代表
発行年月日	西暦　2013年　（平成25年）　3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ひらさわいせきえーちてん 平沢遺跡ａ地点	やちよしかみこうやあざひらさわ 八千代市上高野字平沢 158番地他	1221	217	35度 44分 41秒	140度 7分 41秒	19950410 ～ 19950630	1,250	道路建設
とのだいいせきえーちてん 殿台遺跡ａ地点	やちよしかみこうやあざとのだい 八千代市上高野字殿台 149番2他	1221	218	35度 44分 32秒	140度 7分 46秒	19940817 ～ 19941006	確認上層　370 下層16/3,616 本調査上層 18 下層50	
						19941221 ～ 19941227	確認上層　160 /1,200	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平沢遺跡ａ地点	包蔵地	縄文時代		縄文土器（早期～後期）， 石器（石鏃）	下総上位面に展開する，弥生後期終末期を中心とする集落跡。
	集落跡	弥生時代	竪穴住居跡10軒	弥生土器（南関東系・ 臼井南式・東関東系） 土製品（壺転用器台・ 土製紡錘車） 石器（石鏃・砥石）	
	包蔵地	古墳時代		前期土師器（ひさご形）	
殿台遺跡ａ地点	包蔵地	旧石器時代	遺物集中箇所２地点	石器（剥片・使用痕のある剥片）	文化層は，立川ローム Ⅲ 層下部～Ⅳ 層上 部。
		縄文時代		縄文土器（加曽利Ｂ式）	
		奈良時代		須恵器（甑）	
		江戸時代		在地系土器（焙烙他）	

要　約

今回の成果は，以下のとおりである。

平沢遺跡は，「下総上位面」上の弥生時代後期を中心とした集落である。

竪穴住居跡が10軒検出されたが，1例を除いては重複関係を持たないものであった。遺構密度が高いので，本来は比較的大規模な集落が存在する可能性が高い。

出土した弥生土器は，やや南関東系がメインの組成となっており，在地系の他，東関東系も共伴している。「臼井南式土器」はごく少量の出土にとどまった。

東関東系の中には，口縁部に二列の刺突列を施し，それをまたぐ形で縦長の貼瘤を貼付したところの，いわゆる「仮称　根鹿北式」と呼ばれているものを含む。

時期的には，後期後半～後期末までが中心となるが，破片では後期前半も出土している。そのため，遺跡全体から見た集落の開設時期は，後期前半まで遡る可能性が高い。

遺構は検出されなかったが，縄文土器（早期～後期）・土師器（古墳時代前期ひさご形土器）が抽出でき，平沢遺跡の土地利用史を物語っている。

殿台遺跡は，少量の出土ではあったが，旧石器については「萱田遺跡群第Ⅰ期」の，縄文時代については，後期中葉の資料を得た。井戸状遺構については類例を待ちたい。

千葉県八千代市

平沢遺跡 a地点・殿台遺跡 a地点

― 都市計画道路 3・4・9 号線建設地内埋蔵文化財発掘調査報告書 ―

平成 24 年度

発行日　平成 25 年 3 月 25 日

編　集　八千代市教育委員会
〒 276-0045　八千代市大和田 138-2
TEL. 047-483-1151 代表

発　行　八千代市教育委員会

印　刷　株式会社　山 下 印 刷